

會



報

1966年8月

254

日本山岳会

目次 (会員通信特集号)

ケブネカISEに登る……脇坂 順一……一	久し振りの平ガ岳……藤島 玄……二	屋久島便り……川喜田壮太郎……三	蔵王の山開き……渡辺 公平……三	一ノ倉を眺める……五十嵐 力……三	早大成川君のこと……三	アメリカ便り……三	杉浦輝子、島澄夫、伊藤秀五郎……四	アラスカ偵察 (青大)……九	ボナ山登頂……徳久 球雄……一八	欧州便り……二	石綿清、小野尚俊、脇坂順一……五	諸たより……五	日ネ協会、水野靖子……五	G・コンパス……関口 周也……六	コンパースの手紙 (英文)……六	JAC学生部アラスカ行き……六	コカサス便り (立教大)……九	ヒンズー・クシユ (千葉大)……九	エーデルワイス、テル佐藤……二〇	カウヤラフ報告……坂倉登喜子……二	フエゴ島……石原 国利……二	アフガンへ……東北学院大……二	安川隊より (HK)……二	再びグリーンランドへ……二	グルジア登山隊の来日……袋 一平……二	ソ連の七千米 (II)……田村 俊介……四	提案……森谷 虎彦……三	会務報告……三	熊本支部、小集会、東京支部……三	図書紹介……五	山小屋の旅・越後・東海山岳……五	大分登山報告、海外雑誌年報……七	海外図書紹介……七	インド・エベレスト登頂記……七	レ・アンデ (メチアニ)……七	ルーム当番制実施について……一六	新入会員及び会員異動……一六	東京支部二〇周年行事 (6頁)……一六
----------------------	-------------------	------------------	------------------	-------------------	-------------	-----------	-------------------	----------------	------------------	---------	------------------	---------	--------------	------------------	------------------	-----------------	-----------------	-------------------	------------------	-------------------	----------------	-----------------	---------------	---------------	---------------------	-----------------------	--------------	---------	------------------	---------	------------------	------------------	-----------	-----------------	-----------------	------------------	----------------	---------------------

『ケブネカISE』

Kebnekaise (2117 m)

脇坂 順一

ケブネカISEはスカンジナビア北極圏内の最高峰である。

・2123.3 m, Webster's Geographical Dictionary, 1949

・2123 m, Bertholomew, 1957

・2117 m は最新の高度か——

(編者調べ)

× × ×

暑中御見舞い申し上げます。小学生も元気にヨーロッパの旅を続けておりますが、去る八月四日午後二時四〇分、かねて念願のスカンジナビア北極圏内の最高峰、ケブネカISEの登頂に成功いたしました。左にその時の記録を簡単に記しましたので、会報にでも載せて頂ければ幸いです。

◇

邦人で北極圏の山に登ったという報告は殆んどないようですが、氷河や氷雪の好きな私は、日頃これらの山へ登ってみたいと思っておりました。

今夏、二つの国際学会に出席のため渡欧の機会に恵まれたので、最初の学会が終わって次のが始まるまでの間、北欧の医学視察の余暇に、アイスランドの山に親しむと共に、かねての念願であった北極圏の山に挑んだのであります。何分一人旅であるので、どうしてもザイル仲間としてのガイドが必要であった訳であります。

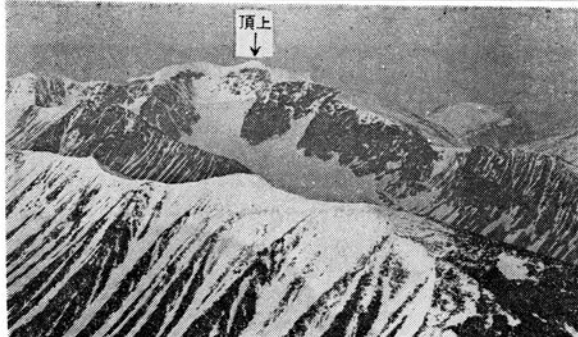
前から、スウェーデンの日本大使館に、ケブネカISEに詳しい優れたガイドの斡旋方を依頼しておきましたが、キルナ (Kiruna, スウェーデン北部の町、鉄鉱で有名) の中学校の先生で、スウェーデン山岳会の顔役らしい(山で会った山男達の彼に対する態度でも

わかった) ベランド (Erik Bellander) という四八才の屈強な、しかもドイツ語の話せる人が、進んでガイドを申し出てくれたので、大変助かりました。

八月二日、ストックホルム発。空路キルナに向い、ガイドの家に一泊。翌三日午前九時半、キルナ発。バスで西方約五五キロのところにあるアロスジャック (Årosjåk) まで行き、それから細長い湖を約一時間五分、モーター付きの大きなボートで走り、ニッカールオクタ (Nikkaluokta) という小さな部落にたどり着く。ここは冬期には気温平均零下40度(最低零下52度の記録がある由)という、スウェーデンで最低気温の部落として有名です。

これから河に沿った碓の多い道を約九キロ歩いて、ラドジョールスベカタン (Ladjoaurukatán) に着き、それから

ケブネカISE山



ら又、湖を小さな発動機舟で渡り(約三五分)、ラドジョールスベカタン (Ladjoaurukatán) という小部落にきました。

それから又、石ころの多い道を二二キロばかり歩いて、ケブネカISE山麓の山小屋に着いたのは午後六時半でありました。この山小屋は650 mの高さにあり、小屋というよりも山荘といった方がピッタリする位の立派なもので、ここまで避暑に来る人も多いようです。

翌四日は曇天でしたが、青空もところどころに見られたので、午前九時に小屋を出ました。氷河を避けて迂回するルートもありますが、私達は氷河を経由することにしました。

北極圏の山なので、もっと大規模な氷河や雪原があるものと期待していましたが、それが意外に少なく、頂上から300 m位のところにある避難小屋に着いたのは午後一時でした。

このルートはしかし、途中大きなクレーバスに幾つもぶつかり、迂回したり、跳び越えたり、又、氷雪のナイフ・エッジを通ったり、マッターホルンの岩壁に近い岩登りなど、いろいろ変化に富んだルートであったので、結構楽しみなが登りました。

この避難小屋で紅茶を沸し、一休みしてから頂上へ向いました。この辺りからかなり濃いガスに包まれ、時には視界10 m位に上ることもありました。

時刻は午後二時四〇分、気温零下七度、風速約10 m。ガイドとお互いに記念写真を撮り合ってから避難小屋まで下山。ここにサイン・ブックがあったので、日本人でこの山に登ったのは貴方が初めてだと、この山の主人のようなガイド氏が、太鼓判を押してくれました。

帰りは同じルートをとるのもどうか
 と思い、迂回路をとってみました。が、
 礫や岩石が極めて多く、却って骨が折
 れました。麓の山荘に着いたのは午後
 八時半。全部で約一二時間の重労働で
 した。

夏の北極圏はいわゆる白夜の状態
 で、日暮れて道遠しということがな
 く、この点非常に有難いと思いまし
 た。早朝、夜明け前に出発する必要が
 ありません。ガイドブックによります
 と、ケブネカイセでは五月三日から七
 月三日までは、一日中(二四時間)

太陽が見られると書いてありました。
 シャワーを浴びて汗を拭い、ガイド
 と一緒に、楽しい又、苦勞した思い出
 を語り合いつつ夕食を済ませ、喜び
 と満足に満ちながら、ベッドに潜り込
 んだことでありました。

(久留米大学医学部外科教授)
 追って小生、明日、チューリヒを
 発ってツェルマットへ参り、マッタ
 ーホルンの第三回目の登頂や、ブラ
 イトホルン、チナール・ロートストリ
 アなどへ登り、次いでオーストリ
 アの第二高峰、グロスベネディガーを

試みる予定です。帰りは南廻りで
 台湾により、新高山に登ったあと、
 九月九日、帰国いたします。
 八月九日、
 チューリヒにて
 協坂 順一

吉沢一郎様

グルジア登山隊の来日

袋 一平

グルジアにショタル・ルスタヴェリ
 という詩人がいた。今年の秋はこの
 人の生誕八〇〇年に当る。ソ連では
 その祭典を行い、またエネスコも
 これを祝って、バリのガリマル書
 店から彼の代表作「虎の皮を着た勇
 士」の記念豪華版を出版した。この
 詩人に興味をもつ世界人の人が、こ
 の秋にモスクワやトビリシに集まる
 という段取りである。

一九六三年秋、私はルスタヴェリ
 の縁故でグルジアに招かれた。招い
 たのはグルジア共和国対外友好文
 化交流協会という国家機関である。前
 から打合せしてあったので、用件が
 ひととおり済むと、私は山へ案内さ
 れた。山といっても季節はずれでも
 あり、じぶんに登る力もないから、
 カフカズの一部の景観をながめるだ
 けだ。それでも私は感動した。

トビリシにもどると、やはりかね
 ての腹案のとおり、協会を通じてダ
 ルジャ山岳会(グルジア共和国アル
 ビニズム連盟)・モスクワのソ連ア
 ルビニズム連盟(支部)に交流登山の
 話をもち出した。当時の会長アレク
 セイ・イワニシヴィリはじめ、幹部
 連は手をあげて賛成した。
 ソ連の山にのぼるオーストリア
 な、したがって永続的な方法はこの
 交流という考えをぬきにしては成立
 しない、というのが私の結論であっ

た。この結論には見当ちがいがあるか
 もしれない。しかし一応は先方にも裏
 書きされて、最初の交流登山が実施さ
 れた。

はじめは一九六五年に日本隊がソ連
 にはいり、六六年にソ連隊が日本に
 くるはずであった。これをくりかえし
 て、日本側は一年おきに漸次その行動
 範囲をひろげ、カフカズからパミール
 まで、さらに天山に向うことになってい

た。予定が狂ったのは、モスクワの連盟
 本部との折衝に、予想外の時間をくわ
 れたためらしい。グルジア側がその国
 民性を發揮して、利害関係や政治的忌
 感などにおかまいなく、この計画の実
 現に突進したことに、かなりの難色が
 しめされたようにも推察される。

逆に、私たちのほうからいえば絶好
 の相手をみつけたことになり、ましま
 りそうもない話がおかげでまとまった
 とも考えられる。

グルジア共和国対外友好文化交流協
 会使節団は六六年六月十一日夕、バイ
 カル号で横浜に到着した。とりあえず
 横浜山岳会を中心に組織された日本グ
 ルジア友好登山協会がこれを迎えて、
 日本の山に案内した。富士山が六月十
 六、十七、十八の三日間、穂高の酒沢が二
 十二日から二十六日までであった。
 日本の山は先方の水準からみると、
 せいぜいツリリスト級以上には出ない
 ので、このくらいの日程が適当である
 ことがわかった。

会費は出して頂けましたか。直
 ぐ次の年が廻って来ます。お忘れ
 でしたら、直ぐにお払い込み下さ
 い。

ア共和国アルビニズム連盟会長。今度
 の旅では記録を受けもったので、幾分
 責任のかい副団長の位置にすわって
 いた。

◇久しぶりの平ガ岳◇

藤島 玄

新潟県の総ての山脈の走行は日本海
 と並行している。三国山脈と越後山脈
 の接点にあたる駒ヶ岳から中ノ岳、
 夷岳、劔ヶ倉山、平ガ岳、景鶴山、尾瀬
 が原に連なる山脈だけが、海岸線と
 直角に本州横断の方向に走っている。
 そして、東の只見川(阿賀川)西の
 利根川の水源となり、高度も二〇〇〇
 米の線を維持している。両端に尾瀬ガ
 原とマンモスダム銀山湖の花と水の美
 をもち、左右に火山性の会津駒ヶ岳、
 燧岳、至仏山、非火山性の八海山、巻
 機山、谷川岳と並列させて、自らは人
 工的の登山施設を受けつけず、自然の
 ままに埋れていた。これだけの恵まれ
 た条件をもって、観察に展望に優れた
 平ガ岳連峰(仮称)の存在は残り少な
 い日本の秘境として珍重にたるとい
 える。

『俺の眼の玉の黒いうちわ』と登山道
 伐開を拒否し続けていた伊倉剛三会員
 の眼の玉を白黒させて、平ガ岳へ直登
 の登山道が四七夏に開通した。事の
 良し悪しはともあれ、できた道の検分
 に、六月二十五、六日の第二回山開き
 に登ってみた。
 小出駅三時、バス車窓から新噴湯の
 折立温泉をみすぎ、二二軒のトンネル
 を抜けて奥只見銀山湖。定期船でハ



北極圏の山々

ヨ止ノ滝の尾瀬口上陸。徒歩で赤岩平から鷹ノ巣の清四郎小屋六時。昔の銀山平の山旅を知る人には夢のような三時間である。しかも、その道を新型のオートバイや耕耘機が走る。

清四郎小屋の夜は、蛙の鳴声と只見川の瀬音だけのしじまの底であった。翌朝はオートバイの爆音に眼覚める。朝食携帯で三時出発。星が輝き、ライトで足先を照らした。

下大倉沢で車道を離れ、いきなり樺林の急坂にかかる。この二本松尾根の急登が下大倉山(約一六九〇米)まで続く。夜明けとともに黒い燐岳がぬうと大きい。頂稜のヒメコマツを縫うて登ると、北側にオオシラビンが加わり、樹間を透して残雪をまとった荒沢岳が光っている。南側は灌木の斜面で燐岳の山体が大きくせり上る。大倉山に立つと、平ガ岳と池ノ岳が白い餅を並べたように重なり、広い尾根を緩いカーブで足下へ延し、その大半は残雪に埋まっている上を、オオシラビンの密林がびっしりおおっている。

地元の青年は倒木群をチェンソーで切断しながら進む。樹林の下に残雪を踏み終ると灌木帯になり二〇〇〇米からハイマツが出る。北側にダケカンバの純林を見たのも珍らしい。

池ノ岳の平頂は、清らかな水を湛えた大小の池の群れで、ヒメシヤクナゲが咲いていた。小笹を分けオオシラビンの二米くらいに揃った林を貫通すると、夏には潤れるような小池をちりばめた平ガ岳の頂上である。三角点のめぐりを伐り払った処に、どっかと腰を下ろして弁当を開いたのが十時。

平頂を遊歩して四周の山々を展望する。雪解けた草原は枯草のままで、見るべき花もまだないが、矢木沢ダムの一部や尾瀬沼の一端がキラリと光っていた。

大湯温泉、枝折峠、駒ガ岳、中ノ岳、

栗岳、銀ガ倉山、平ガ岳、景鶴山、尾瀬高原、尾瀬沼と縦走した。尾瀬は、大正十四年の五月である。大湯温泉館一泊三食一円五十銭の当時、日当四円五十銭を請求した富永重太郎は、九月七月の宮川久雄、三田幸夫両氏の案内を得々と語るが谷筋はともかく、尾根筋はガイドどころかボーダーにすぎず、しかも私は重荷で胸がメリ／＼音だてるほどの難儀した。

重太郎も故人になり、その相棒が残って四十一年前の印象を回顧している。若い連中は玉子石経由で池ノ島へと平ガ岳沢の雪渓を横断して行った。会員五十嵐高志君と往路を戻って清四郎小屋着は、人に遅れて五時に近かった。

屋久島たより

川喜田壮太郎

月に三十五日雨がふるといふ屋久島で、一点の曇りもない快晴にめぐまれ、宮ノ浦岳に登ると、低気圧通過をまち七日鹿兒島から屋久島に渡り、八日花の江河まで登って暮暮、九日宮ノ浦岳頂上から洋上に浮ぶ島々を含む展望を、心ゆくまでたのしみ、午後下山、安房まで出ました。足もとのスゴク悪い道ばかりです。

五月十日

蔵王の山開き

渡辺公平

蔵王の山開きが六月二十六日の日曜日、刈田岳の頂上で行なわれた。会員である白石の渡辺親光課長からのお招きがあったので、神谷名誉会員以下、今井、牧野、沼倉、木村それに小生も加わり、山形から後藤支部長、福島から伊藤支部長、仙台から伊達さん、また村井女史も自然保護協会の会員たちとともに参列。久しぶりで珍しい会員同志の交歓ができて楽しかった。

あいにく蔵王小屋から上は強風とガスに雨もまじってしげい気味。儀式はやむを得ず、刈田山上の県営レストハウス内で開かれた。宮城側から山伏が出てきたり、山形側から天狗さまが現われて大刀の交換が行なわれ、夏山の安泰を祈るなど異色ある行事が面白かったが、青く晴れ上った大空の下でできなかったのが残念。

式が終わってから予定通り南蔵王の縦走に出発。シセキを弁じぬガスと強風で、御老体いずれもこんな日に山を歩いてもつまらんと車で鎌先温泉に下ってしまった。渡った勇士は若い小生と木村君だけ。渡辺課長ら地元の人たちと一時間四十分縦走路入口をスタート。杉ヶ峯、屏風、不忘と稜線を伝って一七時一五分、一の鳥居に降りた。

更に三〇分ほど下ると果道で、そこから九時前小原温泉に到着。先に下山した御老体諸公と合流、大いに羨やましがらせたが、実は足許に咲き乱れた花畑やシヤクナゲ、レンゲツツジの見事だった他は何も見えず、不忘の下りにかかってからガスの包囲を脱出、薄陽さえさしているのに口惜しがったのが真相。

若い僕らはその日の夜行で帰京したが、御老体連、僕らの報告に刺戟され翌日縦走を再挙。意外にも天候が回復して見事に成功。帰京してから「すばらしい快晴にめぐまれてねえ」などが、今度はこちらが逆襲されているが、果してこの程度まで晴れたものか。いずれにしても「快晴」はマユツバものだと思っている。

それはとにかく、このやかましい御老体連のお相手をつとめてくれた渡辺会員に、われわれ若手の分も含めて御礼申し上げます。ガスの中の山旅も非常に楽しかった。



一ノ倉

五十嵐 力

一の倉の雪渓で休んでいるとコップの右をダイレクトに登って来た若い二人のクライマーが顔を出した。「タベはひどいところでビバークしました。」真面目な登攀者の声は疲れの中ではずんでいた。月曜日の山は静かで、彼らの動がカラビナや、ハーケン音のみが快く、六月の未だ梅雨に入らぬ小さな岩の突起に反響した。

吾輩じいさんに、タベはすっかりゴチソウになりすぎたせいか、ビールの冷汗が、ガスになって白毛門の方へ飛んで行くような気がしないでもなかった。

「夏が来るのだな」時折、苗場の空に夏雲のそれが現われ、現われては、フツとガスに消された。肩ノ小屋の前の雪渓でアイゼンを履いてみた。冬の終りの金属音が、なごり惜しそうに無人の小屋の戸をたたいた。

六月六日

◆御安心を◆

若葉かおる候、ますます御清祥のこととおよろこび申しあげます。私たちが昨年、ロッセエ・シャル登山より帰りました。その節は丁重なお見舞いや励ましを賜り、ありがと

うございました。おかげさまで、村井は視力も殆んど正常に戻り仕事に支障なく、成川も、今春三回目の手術の結果、手足とも完全治癒、不自由なく暮せるまでに回復しました。

昭和四十一年五月

早稲田大学ロッセエ・シャル登山隊

隊長 吉川 尚郎

隊員 成川 隆顕

村井 葵

提案

森谷 虎彦

●会報の総目録を何故書きにしたら。目は横に二つについているのだから、それはそれでよいのだが、それなら会報も横書きにすべきと思う。特に横文字の多くなる傾向のあるJACの会報としては、ここらで真剣に考えて貰いたい。

●次には会員名簿のサイズについて。あれは如何にも中途半端である。今、手許にある各種名簿をみると、大部分はB5版で、これより小型なのは、JACと小生の勤め先の分だけである。本はある限度内では大きい方が安い、まあ特別の支障がない限り、会報並みに出来ないものか。

これらについては勿論、役員だけの間で決めず、広く一般会員の意見も反映させてもらいたい。その意味ではアンケートをとってみるのも一方法である。

会報の編集で苦勞している皆様、こんなことをいうのは心苦しいことですが、機会があったら、役員会にでも提案してみて頂きたいと思ひます。

☆アメリカ☆ ☆便利☆

日本山岳会の皆様へ

杉浦 耀子

出発の折は沢山のお見送りをいただきありがとうございました。おかげ様で十七日、日本を発って、もう半月になります。寂しさも感じないうちに、こちらの生活にはまりこめそうです。こちらに来る前は、山から少し遠のくつもりでおりまし、どうして、その反対になりそうです。と申ししたのは、義母がシカゴ山岳会々長としておられますので、義母がこちらに (California) 来て居ります。間中、連日山友達が訪ねて来たり、行ったり、その度にお供をさせられまして、おかげで何人かの山友達が出来ました。一番嬉しかったのは、Dyrenfurth 夫人に会ったことでした。御承知の通り夫人は女性で、最高登頂記録をもった方ですが、想像していたより、ずっと小柄な老人でした。未だ、私が言葉が何とも不自由なために充分なお話も出来ませんでした。紹介していたので十分とかいらない所にお住いです。で、度々おじやまさせていただくことになりそうです。手ごろな年頃の女性クライマーにも会いました。どこにも山屋がいるものだ、とかしく、かつ、嬉しくなりました。話題になる山が、ヒマラヤばかりでなく、アフリカ南米等、なんだか、すごく身近なことのように話しているのが印象的です。

Honey moon に Nevada Desert を横切り、Death Valley を中心に、一週間ばかり遊んで参りました。その

帰路、Mt. Whitney も眺めて来ました。山はどの国でも美しいと思いましたが、ここも又、そう遠くない距離です。度々試みられると思います。今は丁度春(と申しましたが、ここ ORANGE は五月頃の気候ですが、Death Valley は夏は真夏なみです) 緑の季節で、Desert に黄や紫の花が咲き乱れておりました。Desert といえ、砂とサボテンばかりと思っていたのは、どうやらまちがかったようです。Death Valley は、西半球で一番低い土地と聞いていますが、ものすごく広大な谷で、Telescope Peak を中心とする山波がどこまでも続いています。山を眺めながらルートを考えてみました。が、何しろ Salt Lake を横切るのに、キヤラバンだったら、一日や二日はかかるだろうと思うと、もう、うんざりしてあきらめたくなります。それに山肌は、すこくもろそうです。とても登る気になりません。頂上近くに雪が沢山残っていました。こちらでの大きな山岳団体である Sierra Club から案内が来ていますが、もう少し落ちつくまで、と考慮中です。とり急ぎ移動御通知、近況お知らせ申し上げます。これまでの皆様の御厚情に重ねてお礼申し上げますと共に今後ともよろしくお願い致します。

Yoko Sugita Mullen.
(田村幸子)
住所は
1855, East Rose Avenue
Apartment 2 B, Orange,
California

「家族とともに」

島

澄夫

前略、御無沙汰しました。アメリカに来て、早や三ヶ月になります。お

蔭様で家族一同元気にアメリカ生活をエンジョイしております。こゝはニューヨークの北の田舎ですが、車で二時間も走れば、ニューハンプシャーの所謂ニューイングランドの山々が望まれ、冬はスキー、夏は登山と仲々楽しい山行が味わえます。末筆ながら皆様の様によりよくお伝え下さい。(四月九日付、松田宛)

「米国だより」

伊藤秀五郎

連日快晴で快適な旅を続けています。簡易食堂でコーンビーフとキャベジの大盛りをたべた途端に、アメリカの生活感情がよみがえり、日本のことは念頭を去って、旅情をたのしんでいます。カルフォルニア大学や、カトリック系のサンフランシスコ大学を見学して、今夜デンバーへ。グレート・ソルトレイク砂漠はその名にふさわしく異観です。明日はコロラド大学のあるブルダーへ。そこで数日滞在します。

五月三日

・テキサスから・

広谷 精啓

御無沙汰しております。五月中旬より当地テキサス東南部メキシコ湾に面したポート・アーサーに石油の勉強にきています。予定はこゝに七月中旬迄いて、あとはビッツバード、フィラデルフィアなどにはいつて十一月月中旬アラバに行き、十一月上旬か十二月初めに帰国します。こゝは広い平原ばかりで山は全然ありません。海外登山懇談会にでられませんが、大塚さんに宜しくお伝え下さい。(六月八日付、ポート・アーサーにて、松田宛)



◇ツェルマット◇

石綿 清

Grindelwald から Zermatt へ、そして本日フランス側に入りまして、Chamonix に来ております。Mont Blanc は、さすがスイスの最高峰だけの貴族をそなえておりました。今日は雷雨が来まして、珍らしく自然の風物を見せてくれました。山は緑に、花盛りで、氷河の色も、いっそう美しいのではないかと楽しんでおります。一筆まで。

六月十三日

△パリにて△

小野 尚俊

花屋の店先ならぶピンクローズのあじさいの花に故国の初夏がしのばれる。この今日の頃です。日頃御無沙汰致して居りますがお褒り御座います。さてこの度こちらでフランス政府招聘給費留学生試験に合格致しました。従って当初の予定を一ヶ年延長来夏までこちらに留まり研究を続けることになりました。この好機を生かして折角努力するつもりで御座います。

今後ともいっそう御鞭撻御願いたします。末筆ながら遥かに皆様の御健康をお祈り申し上げます。昭和四一年六月

Naotoshi Ono, Chey
Madame Auzerai 43,
Rue Condorcet, Paris Ga

北欧視察

脇坂 順一

拝啓 新緑深き初夏の候となりましたが貴台には御変りなく御健勝御活躍のことと存じます。扱て、私この度七月中旬オックスフォード(イギリス)で開催の世界キリスト者医師会議(日本代表)並びに八月下旬コペンハーゲン(デンマーク)で開催の国際胸部疾患学会に出席のため来る六月二十九日横浜出帆、ソ連経由にて渡欧致すことになりました。この機会にヨーロッパ、特に北欧の医学視察も行い、九月初旬に帰国の予定でございます。

この間二ヶ月余りの不在中は猪口助教はじめ教室のスタッフが萬遺漏なくやってくれた筈ですが、何分ともよろしくお願い申し上げます。先は右御挨拶まで。

昭和四十二年六月十五日
久留米大学医学部 脇坂外科教室
追伸、この度はアイスランドの山々やスカンジナビアの北極圏内の山々を狙っています。マッターホルンの第三登もやるつもりです。

一番新しい Everest の本!!
又、エベレストの本が出た。題して、"Everest Diary", by John D. McCallum, Chicago, 1966, \$4.95. Lute Jerstad の日記をもとにして小説家のマッカラムが作りあげたもの。



・諸・た・よ・り・
日ネ協会のこと

拜啓 木の芽も新たな緑をたたえ小鳥のさえずるこの頃となりました。皆様には益々御健勝の御事とお慶び申し上げます。

さて、当 日本ネパール交換文化協
会では種々の事情により下記に假事務
所を移し従来通り事務を行うことにな
りました。今後ともますます日本ネパ
ール両国の親善と理解を深めていく
ための努力を続けていく所存でござい
ます。よろしく御鞭撻のほどお願いい
たします。

敬具

假事務所記

水野靖子

安いお金で、勤めをやめないで、ヒマラヤ見物をしようと欲ばったことを老えました。

ヒラヤは、大学にいた頃からの夢でしたが、実現させるには、あまりにも遠い存在でした。しかし多くの遠征隊に刺戟され、とうとう百聞は一見にしかず、を実行することにしたわけです。一年分の休暇をつかわずにとつてお

き、それに次の年のを加えて四〇日、冬休みを間にはさめば、まあくどくどなるであらう、二、三の月を二人の

にかなるたまたまといふのが二人の財づもりなりました。出発は四〇年二月十二日。一日。帰国は、四一年二月十六日。時間の節約の為、往復飛行機を使いました。荷物を持てませんので、デント、ラジュニスなどは、ネパールに入り、ヒマラヤン・ソサエティで借りました。食糧はほとんど現地食のみ。

あるいは、カトマンズ、ナムチェバザール、ピラトナガルで、キヤラバンをしていた日数は五十四日でした。ナムチェバザールからピラトナガルへは、お金がなくなっていました。シエルバを使えなくなつてしまいましたので、冬のこととて食糧がうまぐ手に入らず、ひどい思いをしたことも何日かありましたが、どうにか無事、終了しました。

5932 関田美智子
5918 水野 靖子
エーデルワイスクラブ会
東京学芸大学山岳部OB

海へ

坂下 心

私、このたび社命により向う一ヶ年間海上勤務をいたすことになりました。八年余をかけてついに果せなかつたカフカズ・パミール遠征登山の夢を、ひとかたに振り返えりつゝ、せめて山靴をかくしもって、カナダ・アメリカ・インド・パキスタンなど、好奇心にまかせて歩き見て参るつもりであります。

お暇な折には、ご訪船、ご一筆いただきますれば、これに過ぐる喜びはございます。

昭和四十一年六月
東京都中央区八重洲一・二
山下新日本汽船気付、山花丸事務長

グレン・コンヴァー
ス氏のこと

関口 周也

日本へ来ているので、山仲間を求むという手紙を買って、丹波節雄さん、松田雄一さん、鈴木邦之さんに同行して丸ノ内のプレスクラブでグリーン・コングress氏と昼食を共にしたのは、たしか今年一月のことだったと記憶しています。コングressさんはカリフォルニアのスタンフォード大学から東京大学の地震研究所へ研究に来ていられる方、応用数学の研究者で、アメリカのShearaツーカーの会員、日本では時間の都合がつかず次第山登りをしようというわけです。

前記プレスクラブで初めて待ち合せたときのことですが、並んでいる外人中から未知の一人を見つけたのですから大変なことと思っていたのですが、約束の場所であるバーへ入るなり、鈴木邦之さんが一人の外人のところへつかつか「コンヴァースさんですな」「そうです」というわけで難なく合意、あとで鈴木さんいわく、「山へ行く人はどことなくすぐ解る」という次第でした。

その後、二月の東京支部の日光スキーパーティや三水会、総会のときも晩餐会などに出席して、山仲間を求めました。その富士山へ登る打合せのとき、六月初旬は身体がいかからず、か東北の山へ行きたいが、ということで、折しも折、ちょうど越後支したの、藤島玄さんの寿像除幕式と記念山行があるから行たらどうかと松田雅一さんにすゝめられて今回の新潟行になったわけです。この新潟行は最初小生が同行する筈でしたが、仕事の都合で不可能になって了い、彼一人で行くことになったもので、集会所が越

で、その地方に未知な外人が一人で行くことについて、松田雄一さん共々心配したものです。なにしろ我国にはローカル線が英語で書いてある地図などは皆無ですから、いちいち英語に頼りて地図に当てはめ、列車の乗換えや時間をこまごま説明して送り出しました。都合にかれて、行かれなくなつてしまひ何だか彼に気の毒な気がなつて、松田さんには特に藤島玄さん、斎藤平七さんに、小生は井口正男さんへ電話で特にお願いいたしました。

ところが案ずるより生むは易しのたとえどおり、帰京早々に小生のところへ来、全くすばらしい旅だとの連続で、何を聞いてもよかった、よかったとのこと、余計な心配をしたわけでした。

smog and hot weather of Tokyo. Little did I realize that for the next five days I would have a most pleasant and heartwarming visit in some truly beautiful country and with many fun-loving and gracious Japanese. From the time I was met at Niigata Station until the time I had to say a somewhat sorrowful farewell to a wonderful companion and to Niigata on the following Wednesday (July 6) night, I was treated to excellent hospitality, warm friendship, and exposure of a picturesque area of Japan.

From the Niigata Station, where I was met by three members of the Echigo Chapter, we traveled

これも新潟在住の会員諸氏の親切によるもので、松田さんも「会員のつながり」に負うものだということをしみじみ感じ、同時にコンファーストのすばらしい旅をうらやましく思ったものです。最高のもてなしと温かい友情を受けたということはお世辞ではなく、また思い出を新たにするため、いつかまたやって来しようという結び

の言葉も彼の真情でありました。日本での山登りを一層楽しいものにするため、帰京後早速本会に入会されたことを併せてお知らせします。

左記は、新潟での大歓迎に感激したコンパース氏が、本会当てに送ってきた手紙です。

July 14, 1966
Leaving Ueno Station Saturday morning, July 2, 1966, I began what I thought would be just an excursion to Niigata-ken and a most welcome chance to evade the

smog and hot weather of Tokyo. Little did I realize that for the next five days I would have a most pleasant and heartwarming visit in some truly beautiful country and with many fun-loving and gracious Japanese. From there I was met at Niigata Station until the time I had to say a somewhat sorrowful farewell to a wonderful companion and to Niigata on the following Wednesday (July 6) night. I was treated to excellent hospitality, warm friendship, and exposure of a picturesque area of Japan.

From the Niigata Station, where I was met by three members of the Echigo Chapter, we traveled by car to Shimoseki and the Seiryu Onsen. After the unveiling ceremony of the relief of Mr. Fujishima, a group of about 50 to 60 people (not all of them hikers) settled down to an evening of sake, sashimi, and geisha. There seemed to be an endless supply of sake. As a result almost everyone was feeling very relaxed in a rather short time. Those poor geishas had their hands full. To spend such a boisterous evening is not the best way to be in good condition for the next day's hike, but there wasn't one among us who was at all worried about hangovers or lack of sleep. I met so many interesting people that my head began to swim from all the names I tried to remember. The meichi kept piling up until I had a stack about a centimeter thick. Whether drunk or sober, everyone

appeared to be quite happy that I was there. I had the distinct feeling that foreigners are a rarity in the Sekigawamura area.

Notwithstanding the heavy celebration of the night before, we dragged ourselves out of bed at 5 in the morning. There were about 20 of us who intended to hike to Mr. Eburiashi that day. Originally, Mr. Sugamura, a Niigata University Medical Student, and I had planned to go on from Eburiashi to Mr. Iide, but the continual rainy weather and poor visibility made our plans coincide with the others. I must say how much I enjoyed being with Mr. Sugamura. He spoke English quite well and our mutual love of the outdoors helped form a very close friendship.

We started climbing at 8 and were soon enveloped in an intermittent rain which lasted all that day and the next. The trail started out easily enough, but soon we were climbing up extremely steep hills and ridges. I had no idea that hiking trails in the mountains of Japan could be so steep. To my knowledge, we have no trails in the Sierra Nevada which are anywhere near as steep (and certainly dirt trails are not). So I had my troubles with the trail, which also became muddier and more slippery as time went on. I hiked with four others and I'm sad to say I was by far in the worst shape of them all. The uneven pace along the trail, the wet weather, the effects of little sleep

and too much sake - all combined to slow me down. By the time we reached the hut near the summit of Mr. Eburiashi, a climb which took seven and a half hours, I was very tired and quite relieved to be able to sit and relax my aching legs.

Soon the rest of our group joined us and another evening of merriment began. The hut began to look a little like Tokyo Station at rush hour. People were everywhere, and where there weren't people, many wet clothes were hanging to dry. It didn't take long until the beer, sake, and whiskey came out of the packs and another round of singing began. Tiredness came upon me quickly and I retired to spend a very restful night.

—The next day the relief was put in place near the hut, although I did not see the ceremony. We returned to civilization via a different but equally steep ridge route and eventually ended up near the town of Oishi. A truck and the Seiryuso private bus brought us back to Niigata. I spent that evening and the following morning at the home of Mr. Hiroshi Fujii. Mr. Fujii is also a member of the Echigo Chapter. On Tuesday, he introduced Mr. Sugamura and myself to Mr. Yoshikawa, the secretary to the Mayor. I was able to learn quite a lot about the events of the Niigata earthquake of two years ago. We were also shown the city and the construction of docking facilities

where eventually a large industrial complex will be located. I spent a fascinating five hours learning about a very beautiful city.

By this time, the weather had become quite good. On the day of our tour, the sky was almost devoid of clouds and the temperature was about 20°C. That afternoon Mr. Sugamura and I left for Sadogashima, where we spent an all too short 24 hours seeing as much as we could. We spent the night at Himezu, near Aikawa, in the very attractive Senkaku Youth Hostel. As we ate dinner, we could look out across the water and see the lights of the many squid fishing boats. The next morning we took a boat to the nearby resort area of Ageshima. The coast line along this part of Sado is most interesting. After visiting the aquarium, we returned to Ryotsu and then went to the top of Donden Mountain. Again the weather was excellent. Unfortunately all the rhododendron had withered away. We spent a very relaxing three hours sitting and viewing Ryotsu harbor. But time, that evil demon, kept eating away on our lazily spent afternoon and it was all too soon that we had to return to Niigata.

My last evening was spent roughly the same way as the first evening - drinking. This time, however, I stuck to beer and enjoyed the wonderful view from the beer garden at the Toei Hotel. Mr. Fujii and another mountain climbing friend had joined us.

And Mr. Fujii's mother, bless her heart, had washed all of my dirty clothes for me. What service!

Soon it was time to go, as I had to catch the night train back to Tokyo. Those five days in Niigata Ken will always be remembered by me, not only for the marvelous country which I saw every day but also for the wonderful people I met and the warm friendships I made. I felt like someone of royal blood, I was treated so well. Every effort was made to make me stay an enjoyable one. I'm only sorry I couldn't stay longer, but I know that some day I shall return and renew the memories which are so firmly embedded in my heart.

Submitted with
warmest regards,

Glenn Converse
Disin Kenkyusyo
(Earthquake Research Institute)
Tokyo University, Japan

◆お知らせ◆ 東京支部

東京支部では、支部設立二〇周年を記念して、次のような行事を予定しております。詳細は追ってお知らせいたします。

記

- 一、記念集会 10月19日(水)
松屋サロン(一〇〇〇円)
- 二、記念山行 11月3日
奥武蔵定峰高原大雲山
貸初バスにて日帰り。
会費 五〇〇円

JAC 学生部 アラスカ 登山隊 便り



錦織 英夫

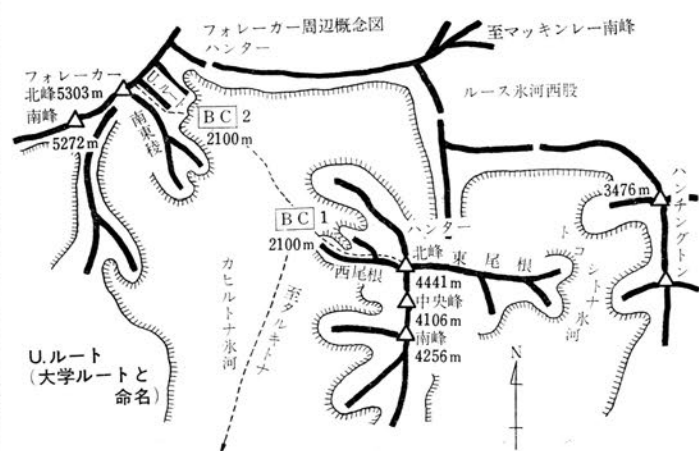


左記二つの報告は、多少重複した点もあるが、両方とも貴重であるし、趣きのちがった節も見られるので、敢えて同時掲載することにした。お許し願いたい。

御手紙ありがとうございます。氷河の上で読みました。登りました。四八日間の山を終え、夏のさかりのタルキトナに全員無事元気いっぱい帰りました。僕としては、充分満足の行く心にながいた通りの会心(興奮)からではありません。アンカレッジの夜の冷気に頭はさえています。山の登りでした。これの定義は難しい。ミスのないことは当然ですが、僕としては、更に強烈な(うまく表現出来ません)体験であることが条件です。そして充分タフに動きまわること。こんな山登りを頭に描き、それをアラスカの氷河の山に投影出来た自分のすきたる幸運を思わないではいられません。この気持は他のメンバーにもそのまゝ通じる感慨であろうと思います。忠告してもうけた順序通りでは決してありませんが、成功の一事は全てを凌駕するようです。この山にはローガンでの、又その後の日本での山登りが充分生きていたことを先ず報告しておきます。アラスカの小さな山で、さ々やかな体験ではありましたが、これまで意中の集中と協力、そうして情熱の燃焼、これを折れ線グラフに現わすと美しい放物線の軌跡をたどるのではな

いかと思われず。この四八日間、どうにか自分は山登り自体の楽しさと、それに附随する諸々の良さを知った気がします。そうしてかなりの自信を得たことも確かです。ハンターとフォレイカーは新ルートをやつけた。ハンターは新ルートを西面に変えやはり良かったと確信しています。東尾根の代りにフォレイカーという思わぬもうけ物をしました。ハンターは予想以上に難かしい山でした。ローガンとは全然ちがう純粹にテクニクの山です。山が低いと別の登り難さがあるようです。日中の陽しさに融ける雪、氷との不安定な接触、足場の崩壊、雪崩、どれも好きになれません。岩登りもかなり派手、氷のステップカッティングは腕がはれる程でした。雪庇のナイフリッジ、初めて出つくわす奴がかなりです。日本の山にたとえるのはふさわしくありませんが、利尻の南稜を大きく、ぐっと悪く、その間に滝谷のクラック尾根あたりを組み入れたような感じ。アタックはACを予定地に出せず一六〇〇米をラッシュしました。私はラッシュを信条としています。

最初の山としては少々手強すぎたようです。しかし技術的な自信はかなりつきました。フォレイカーは、マッキンレー以上に迫力のある堂々たる山です。BCをカヒルトナ氷河を八KM横断したところに移動、ルーツは東面のアイスフォールで唯一とも思えるようなルートを一発の偵察で見つけた。このアイスフォールは第二登をしたハーパーの連中も先ずトライしたようですが、すぐ南東リッジに転向しています。かなり変化の大きい氷河で撤収の際はずいぶん苦労していました。この山ではハンターでようやく慣れたスピードで一気に登ることができました。BCが二〇五〇米、二日でC1(二九五〇米)設置、全員これに入りましたが、この後の悪天は実にしどろもどろでした。七月一日から二日間連続して降り続き、日本の冬山以上の悪天に驚いたもので、それからは天気の良い間をねらうては、盗襲し七月三日にACを北稜上(三五五〇米)に出しました。それから毎日冬富士のような風が吹きまくり、三日後、ほんのちよっとした雪のあい間に三名で(錦織、磯、佐村)で一気に登りました。頂上まで一八〇〇米、北稜は富士山を急にしたような大斜面で、連日の悪天に斜面は半分なくクラストし、アイゼンがやと引つかふくらい、ふくらはぎの猛烈に痛む登りでした。ACより八時間後には、強風の北峰(五三〇三米)に立ちました(七月七日)いつも見上げていたマッキンレーも、そう苦にならない高さまで来たわけ。ホワイトアウトと寒気に苦勞しながらも、その日の午後四時帰幕しました。残り一日で二次アタックを出すべく待期しましたがずっと雪で、それもあきらめ、撤収は雪崩におびえながら一米を越すラッセル、降雪、ガス、開いたクレバスに気色を



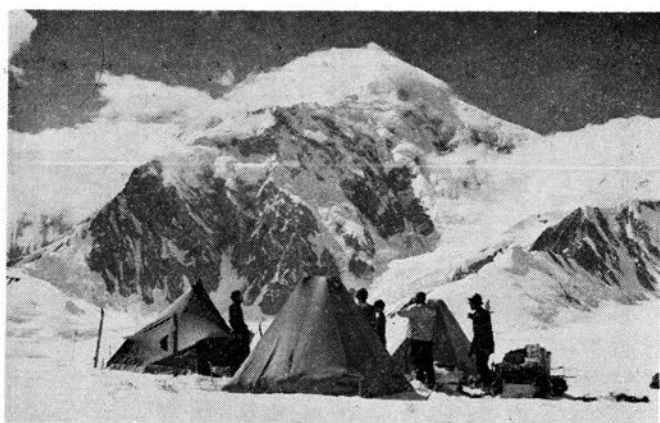
悪くしながら、十日無事BCに降りました。予定を一日残す十四日間の期間でした。こうして間一髪のところではフォレイカーをものにしましたが、この悪天には他の隊も苦勞したようで、近くのラッセル(三五七米)を攻めていたシブトン(遂にアラスカにまで来ました)。もともと飛べざるやらの失敗したようです。マッキンレーをねらった一隊も目的をはたさず下山して行きました。下山は予定通りアラスカの氷河を楽しました。BCからタルキトナまで一八〇キロ、その中カヒルトナ氷河が五六キロ、ブッシュ帯の通過が二五キロでマイニングロードに出ました。カヒルトナ氷河は三日でぬけてしまいがち

々気ぬけた程おとなしい氷河で、ローガン氷河のあのウォリッシュとの出合のような悪さはなく、兩岸に美しい無名の山を眺めながらの旅は楽しい一語に尽きました。しかし、氷河を出て、氷の濁流の渡渉には大分しごかれました。雪どけに増水した流れを何度か泳いで渡るといった場面もあり、氷河の水浴に音をあげたものです。ザイル、ヤッケ、山靴をつけても泳げることが分かりました。しかし、やはりゴムボートは必要のようです。これよりもっと渡渉の多いトコシナ氷河だっただけで、さらさらと流れる程です。この後、更にムース熊のひんばりに出没する例の原野の二日間の敷き山以上

に恐いもので、大きなブラウンベアの親子づれにそりそり退散しました。この熊の恐しさは川崎さんにも御存知、この二日間の圧迫感は想像願えらると思います。七月一日無事キャッシュクリックの道に出、先ず金探しの連中の屋敷にありつき(泣ける程うまかった)更にピタスビルでは山師夫婦の大歓迎に会い一晩その家に泊り、ウォトカをたんまりごちそうになり、翌日はタルキトナまで車で送ってくれました。全く親切なものです。

●パーティのこと●
仲良くやっています。さすが、各校のリーダー、素晴らしいパーティです。この種のジョイント・パーティでもどん出るようになるとJACも安泰ということでしょう。なれあいパーティなどと批判する人もいるようですが、僕らには、僕らなりの性格があり、うまく作用させればきっと良いチームが出来ます。なれあいだなんて言う奴はケツの穴の小さい奴に決っています。しかし珍奇なパーティではあります。人気は一番、こちらの連中に受けは非常によろしいようです。三山の中、二山を登り、更に氷河を歩いて降り、この連中もすっかり驚いている様子です。

●ここの連中と山のこと●
これを機にうんと接触しておくつもりで、タルキトナでは折良くウォシバン博士がいわせ、早速彼を訪ねた。老の身にもかわらず言うことは、はつきりしています。マッキンレーのガイドブックを執筆中だそうです。我々の成功を喜んでくれました。又我々のフォレイカーのルートをユニバシティルートと呼称することはグッドアイデアであると賛成してくれました。これでシブトンにでも会えると、言うことなしです。マッキンレーは相変わらず人気があります。この山に新鮮味はありません。クライミングだけを楽しむ山です。この四月、近くのルース氷河に山小屋まで出ました。アメリカの連中のブレイグランド、ヨーロッパ・アルプスの運命にあります。しかしここで豪快な岩登り(カシンのやつたサウスバットレス)をやるのも悪くありません。アラスカの山もバリエーションの傾向がはっきりしてきてきたようです。これの良いの、じゃんじゃん出ることを期待しています。



Foraker 北峰 南東稜 (正面)
JAC 隊の University Route
は右の雲の下と思う。
初登後 H. Adams Carter
が編者へ送ってきたもの。

1、フォレ
イカー両峰の
第三登に成功
しました。以
上の経過を御
報告致します
と共に、七月
十一日付登山
隊リーダー錦
織英夫よりの登頂成功の第
一信をここに御報告致しま
す。

◇ ◇ ◇
ハンター・フォレイカ
ー両峰の第三登に成功致す
ことが出来ました。この一
事を報告することが出来、
まことに嬉しく思っています。
BC入りしてから昨日
フォレイカーを下山するま
で、三七日間素晴らしい山登
りであったこと、そして何
よりも楽しい山登りであり
ました。以下両峰登頂の経
過を御伝えします。

JAC 学生部
正式登山報告
すでに御承知のように日本山岳会学
生部では、昨年度学生部委員校を中心
とする学習院、慶応、芝工、専修、明
葉大の六名からなる登山隊をアラス
カ、ハンター峰 (5,303m) およびフ
ォレイカー峰 (5,303m) に送りだし
ております。四月初旬、中旬、五月上
旬と三便にわけて出航致しました隊員
は、米国シアトルを基点に、陸路レン
タカーを駆使致し登山基地タルキート
ナに五月三〇日集結致しました。つい
でセスナ機による空輸のすえ、六月三
日無事カヒルトナ氷河 2153m 地点
にベースキャンプを設営致しました。
以来五〇日間全員よく健闘し、ハンタ

六月三日BC全員集結。ベースはハ
ンターの西尾根直下の無名氷河 2161
m 地点です。ルートは尾根の、それ
も極めてシャープなリッジを行くも
ではっきりしており、難しさは技術的
なものに集中されております。2765
m のロックピナクルの通過は南側の
岩のバンドを見つづけることが出来ま
した。ここから 2886m ピークまでは
雪底のずつと張りだしたナイリッジで
、所謂ベニヤ板の状態(氷の上にと
けたザラメ雪がのっている)に苦労し
た所です。このピークを越したコルか
ら 400m の岩稜地帯が一番この山で
苦労しました。この間一分のすきもな
く、フィックスを張りめぐらしたのだ
が、空間をアプミで越えたり、仲々大
したルートです。日本の岩登りで云え

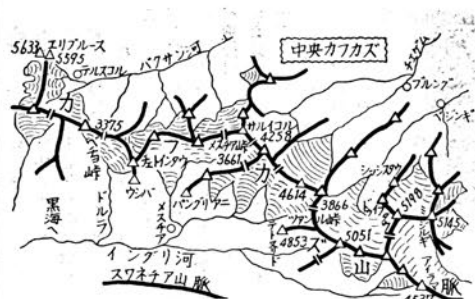
ば山のスケールを差し引いても滝谷の
クラック尾根位のグレードを与えたく
なります。C(40)を 2887m 地点
にだすように努めたのですが、この岩
稜帯、更に上部の氷のピッチを越えて
の負荷ははなはだ不利と悟り、岩稜帯
の始まる 2880m コルの中継キャム
プをそのままACとすることにしまし
た。そしてこれからルート作を何度
もくりかえし一気にラッシュする作戦
に切り変えました。この頃から天気悪
化し、ガスと湿雪が毎日のように続き
ました。ルートが悪い上に天気の方も
芳しくないで、動きたさどどうして
もオーバーに行動してしまい、すぐ二
〇時間位動いてしまいます。

六月十九日午後五時いよいよアタ
ックに向いました。ACより頂上まで
1763m 六人全員のラッシュです。距
離は頂上までの 55m 位で大したことは
ないのですが、ルートの大半は僕らが
初めて経験する、うな悪いピッチの連
続でした。そして四日間わたるアタ
ックの末、頂上台地に続く大斜面に達
したのは二〇日午前七時でした。頂上
直下の西壁は高度障害も伴ない苦しい
ピッチでしたが皆良くんが、午後
八時全員登頂に成功致しました。そし
てフィックスを次のフォレイカーに
一時間よりやく再びテントの人となりま
した。こうして六六時間に及ぶアタ
ックを終えたのですが、皆良く頑張り少
しのミスもなかったことに満足してい
ます。そして二四・二五日にかけて一
気にベースに下山しました。ともかく
想像以上に難しい山で日数も二日を
要し、フィックスは実に 1,040m も使
いました。

二日休養後次のフォレイカーを目指
しました。ルートは南東稜と北稜の間
の氷河から小リッジに出、更に北稜に
続く雪のルートで新ルートです。問題
は下部の二帯に広がる高距 600m の
アイスフォールです。それと絶え間な
い雪崩は全く脅威でありました。
先ず我々はBCを 8km 移動しまし
た。そしてその際中、幸運にも唯一と
も思えるルートを発見し、例のJAC
より借りたナワバシゴを利用しこのア
イスフォールを突破することが出来ま
した。それから利尻岳のような実に
美しいナイフリッジです。そして
2,930m にCを出し七月一日全員こ
れに入りました。しかしこの後風雪は
一〇日もやまづ、わずかの雪の合間を
ぬって、我々は更に 2,930m にAC
を設営し、これに錦織、磯、佐村の三
名が入りました。そして頂上まで
1,800m 登り一方のまるで富士山
のような斜面を更に急に上った所を、しか
もアイゼンがやつときくような硬雪を
ふくらはぎを痛くしながら十五時間
にわたる未登頂することが出来ました。
実に七月七日七夕の朝でした。

この後二次アタックを出すべく努力
したのですが風雪はそれを許しませ
んでした。
そして七月二〇日全員BCにいる
わけですが二峰を登れたことは真にこ
のうえなく幸せです。チームワークは全
く問題なく全でうまくいきましく、
はり各校のリーダーであるつくづく
感謝致しています。そして学生でも
否学生であればこそ、この種のジョイ
ントパーティーは充分可能であり、単
独パーティーにない長所が充分発揮出
来たと思います。

この後の 56km のカヒルトナ氷河
の旅を楽しみに荷物を整理していま
す。村木さんはじめ山岳会の皆様にく
れぐれもよろしくお伝え下さい。
一九六六年七月十一日
雪降るベースで 錦織英夫
◇ ◇ ◇
このような山登りの仕方には色々な
批判があると思う。もし天候、氷雪の
状態、地形等の自然条件に予期せぬこ
とが起こったならば、たちまち窮地に
おちいったかもしれない。云わば危険
と紙一重の差を無事すり抜けたと云う
感じである。このような若さで気力体
力にあふれた冒険的な山登りというも
のはそう幾度も経験出来るものではな
かるが、人生のある時期に誰れでも
一度は夢み、また一度やらせてみた
いと思うものであろう。今回の試みが
無事成功裡に終わったことは彼等にと
って望外の幸せであつたと思うと共に、
学生登山界の将来を暗示する明るい指
標の一つとも思えるのである。しかし
私共留守をあずかったものにとつては
重荷をおろしてほつたような感じ
であることも否めない事実である。
ここにとりあえずの御報告をして、
大方の御後援に感謝すると共に、あ
わせて今後の御指導をお願いする次第
であります。



立教大学コトカサ登山隊一同
ビマチゴルスカにて

コトカサ便り —立教大学隊—

日本山岳会御中

色々とお世話を賜りまして誠にありがとうございます。た。おかげ様で、ナホトカ、ハバロフスク、モスクワの長旅を終え、カフカズの麓、ビヤチゴルスカに着きました。これより約百五十キロ、朝などは、エルブルースの真

白な双耳を見ることが出来ます。明六月五日より、バクサンの谷をさかのぼり、カフカズのふところに入りエルブルース、その他の山々に登山の予定です。今日、当ビマチゴルスカにあるカフカズ山岳会の人たちと交歓会がありました。日ソの登山様式の違い、器具その他についての活発な質疑応答があり、我々もかなりの収穫がありました。帰国は七月十日頃の予定です。その節は、また、お伺いの上、くわしく御報告させていただきます。山岳会の皆様へ宜しくお伝え下さい。

一九六六年六月四日

前略 大変ごぶさたしております。

JACの会報に出ておりました通り、ソ連登山は不許可になりましたが、その後、インツェリリストより二月二十八日付で連絡が来ました。私たちがソ連国内を旅行しながら登山の基地を見て出来れば山を登らせようとの申し入れを許可する。ということになりました。

しかし、それからが大変で、出発の日も行動の予定もわずかに、エルブルースを登らせようというところしか決まらず、五月二十五日になって、やっとセミスボーツのアルビニストとしてエルブルースのキャンプで二十日(二十五日の登山を許可する。詳細はエルブルースのイトコールで聞くこと。ということ。二十八日の船に乗りました。器具も費用も全くわからず、新聞は適当なことを書くといった具合で弱まりましたが、モスクワで極東課のミセス・デボヤンと会って、意外に理解ある態度を示され、MR. OLEGという、去年モスクワ大学を出たサンボの選手を通訳として派遣してくれることになり、前後、銀光、中、二十日は自由に登山という話になり、五月二日、ビマチゴルスカという処にモスクワから飛びました。初めての印象は、ソ連とは意外に明るく豊かな国だということでした。エルブルースの麓、アドウイルス登山学校(エルブルース基地とも云っています)には、五日に入りました。約三百人程人がいて、スポーツ・マスターとか、トレーナーが朝から真剣にトレーニングしている姿は、しみじみ私たちの日頃の登山に対する考えを再検討させる姿です。実に真面目に山について考えています。ここから、ウシユバ、ドングスホルン、ルシヘダ、ナクラ、エルブルース、ジカントガンといった大物がずらりと並んでいて、殆んど基地になっております。彼

らは、日本という山登りはツェリリストに毛のはえた程度のことで、アルビニストとは五とか六の壁を登る人であり、私たちが最初どこを登るのかと聞かれ、装備は不十分だし、体調は不十分だし、彼らの期待に反し、3Aか2B程度の山しか登らないと答えざるを得ませんでした。帰ってからお話しする機会もあると思いますが、物凄くトレーニングを続けた連中が、うまいよトレーニング。ヒマラヤに較べよう問題にならないにしても、コトカサの山は鋭角で美しい山ばかりです。食物も、道路も、宿舎も、登山マナーも整っており非常に良い処です。

五月八日からエルブルースに出掛けました。最初、一〇五五メートルに泊り、翌日十一人の泊場に入り、雪は二千五百メートルからあり、天候は普通でした。今年、二バーティ入って登頂の成否は、不明とか。私たちのバーティ七人、我々が鉄人と名づけたMR. コーリーという二十才のスポーツマスターのアルビニストが参加し、十一人の小屋の番人が小屋を開けるために同行しました。九日夜、十一時三十分。私たちだけでエルブルースのルートを書いて出発しましたが、一時間程で吹雪となり、パストボの岩場の越え、トラバシして、西峰、東峰のコー、五千二百メートル、朝七時三十分には達しましたが、三十分の待機後、全く見込みなく下山しました。初め、下山路が解らなく、ビマチチェリのゾウのキャンプの時と同様の手痛い目にあい、十時頃、十一人の小屋(約四千米)に着きました。コーリーが、青くなって心配して、私たちは翌十一日下山しました。十二日午後二時までに、キャンプに下らないと、サーベーション・バーティが出るこのことなので残念でしたが下らざるを得ません。十一

人の小屋から、一〇五五メートルに出るまでに、また吹雪かれ、一時間程、迷いました。鉄人と小屋番がいて、標識があつて、これですからこの山の問題点が御理解いただけると思います。天候だけですが、いつもガスで、まだ頂上は見ることがありません。七月中旬以後がシーズンです。そんなわけでキャンプに戻り、十一日夕刻、中村隊長と合流し、もう一度、十七日からエルブルースへ出掛けのチャンを与えるよう交渉後、十三日からシャントガン(3B)、PKカフカズ(2B)、マレ・シヘルダ(2B)その他二、三の四千〜四千三百メートルの山へ出掛け、十六日帰る予定です。何はともあれ私達は、ソ連とコトカサについて知らなすぎました。登ること、山の写真とカテゴリーで二十日間、余りに短かいようです。

ウシユバに至っては、去年ブルガリア隊が三十人全員死亡の事故があり、全く手がつけられない状況でしたが、出発前にお会いして、色々御教えたので、何とか、初めてソ連の山へ来られた機会に出来るだけのものをつかんで帰る、例え山には登れなくても、何か、モノにしたいと思っております。なお、ソ連内の登山はインツェリリストのデボヤンさんを通すと意外に簡単です。但し、費用は一人一日、十三ドルを要すると思います。こんなところが私の近況です。(中略)……帰国は、私たちは七月上旬になる予定なので、その後にはまたお目にかかれればと思いますが、くれぐれも皆様によろしく。

イトコール。エルブルース・キャンプにて
六月十三日
(松田雄一宛)

アラスカ偵察

—青山学院大学隊—

お元気でいらっしゃいますか。私、いま青山学院大学山岳部アラスカ遠征隊の偵察に一人でアンカレッジへ来ております。丁度マッキンレイをやった明治大OB高橋進氏の働いているZIKO GARDENに泊っています。が、近々、荷物をまとめてALASKA RANGEの一角BLACK RAPIDS氷河に単独で入る予定です。このあたりは芳野氏にうかがうと、なかなかノビリしたよい所ようです。もちろん未踏峰がたくさんあります。アンカレッジへ来る途中、日本時間の真夜中、十二時に太陽が昇って、空いめんな明るくなったのには驚きました。ブライアン・ペアに氣をつけて、せいぜい日本の梅雨の時期だけ、こちらの山を楽しまたいと思っています。JACの皆様によろしく。

六月十三日 アンカレッジにて
(松方会長宛) 栗林一路

△ヒンズー・クシュ△

—千葉大学隊—

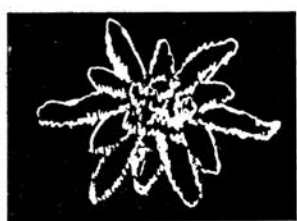
緑深まりました此頃、愈々御健勝のことと存じます。この度のアフガニスタン調査隊派遣に關しましては並々ならぬ御理解、御援助を賜わり厚く御礼申し上げます。お蔭をもちまして準備もとの、六月五日東京空港発でカラチ経由カブールに向い八月末日まで調査、登山に従事して参ります。留守中何かと御厄介になることと存じますが、よろしくお願い申し上げます。とりあえず御礼をかね御挨拶まで。

昭和四十一年五月
千葉大学ヒマラヤ委員会
千葉大学アフガニスタン調査隊
隊長・中馬隆雄、他隊員四名

謹啓 向暑の候、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。

当クラブ創立十周年記念の海外遠征計画は、幾度か変更になりましたが、この程ペルー・アンデスに遠征いたすことになりました。皆さまの絶大なるご支援のおかげで漸く準備もとのい、五月三日には先発黒石隊員六名が横浜港より出発、五月二十七日には坂倉隊長が羽田空港よりカナダ航空で出発いたします。

六月一日リマを発ってカウヤラフ山群で高度順化を行なった後、七月一日ワラスを出発。ケルカイワンカ源流を遡り、七月中旬頃、ネバド・ブカラン



エーデルワイスクラブ
— アンデス便り —

ラ峰（六一四七米）の登頂を期し、併せてペルー・日本間の親善交流を深めて参りたいと思ひます。

出発に際しまして遠征隊に賜りましたご厚情に對し心から感謝申し上げます。

エーデルワイス・クラブ
ペルー・アンデス遠征隊
隊長・坂倉登喜子
隊員・黒石 恒、鈴木 文子
三浦多美子、根本 洋子
松田 柳子、大沢 萬
昭和四十一年五月二十日
エーデルワイス・クラブ
海外遠征委員会
(連絡先) 武蔵野市吉祥寺二(二)一〇 谷口喜久子

遠征につきましては、種々御高配下さいましてありがとうございます。おかげさまで、五月二十九日、リマへ集結、大使館その他へ挨拶回りを済ませて、六月二日ワラスへ参りました。

四、〇四〇米のコンコチャ峠付近から、ワスカランの雪峰が見えた時は感激でした。町から六、〇〇〇米級の雪峰が仰げると、ためいきが出ます。あまりにも、すばらしく美しいので、今年には二十六隊、登山隊が来るそうで、その内、女性隊は世界でも珍らしいと一流新聞社に大きく取り上げられました。

山岳会の皆さまの御支援に感謝しております。

◆ 坂倉 登喜子

出発の際には電報を有難うございました。とうとう計画が実行に移りました。ハワイ、ロス、メヒコ、パナマ、ボゴタを経て、二十一日リマに着きました。リマは今、秋に移りつつあり、朝夕はかなり冷えます。が緯度が低いので日中は暑い位で、プーエンビリアやゼラニウムが美しく街を彩っています。飛行機から幸運にもコルディエラ・ブランカが手にとるように見られ、胸がドキドキいたしました。

松田 柳子

色々お世話になりました。昨日目的のリマに到着いたしました。先発の私達二名には何かと用事があり、その上スペイン語でなくては通じませんので、大変苦しいのですが、色々なことを覚えて楽しく過しております。後発の人達を待って六月初旬には山へ入ります。では御気遣い。 鈴木 文子

C/O Embajada del Japon,
San Felipe No. 356, Pueblo
Libre, Lima, Peru.

Ⅲ 支笏湖付近Ⅲ

しばらく御無沙汰をいたしました。会報いつも御苦勞様。少しでもお助けの意味で、この葉書（女性アンデス隊からの便り）を封入します。

夕べおそく北海道から帰えりました。望月さんに教えて頂き、支笏湖付近の山を歩いて参り、とても楽しうございました。

山では殆んど誰にも会わず、熊の足跡を残雪の上に沢山見つけて胆を冷やしました。

樽前山からシヤモナイの谷を歩くつもりでしたが、女一人では熊にやられるからと、みんなに止められ、この年になってもまだまだ歩きたい山があるので、いのちが惜しく、旧道をおりてガスにまかれたり、いろいろな経験をしました。さようなら。

六月一日

編者宛

テル佐藤

◆ ◆ ◆

谷川宅にて 坂倉登喜子
この度の遠征計画につきましては一方ならぬお世話になりました。ありがとうございます。

お蔭様で高度順化山行カウヤラフ主峰の山行も終り、唯今ワラスへ戻って、次のブカランへの準備をしております。

吉沢様のことは、谷川家の食事の折、いろいろ話題にのり、パブロからも吉沢さんのこと聞かれました。心配していた高山病も唯一人熱を出した隊員が参りましたが、大したこともなく、皆元気で下山しました。

私もカウヤラフ主峰稜線クレバス(5,300m)の地点までのんびりと登れたので、私としては最高でした。松田

さんはリマ組でしたが、精神的に張切っていたので、終始元気で動いて下さいました。

今年はアンデス方面へ、全国で三〇隊というラッシュです。そのうち女性隊は紅一点ということで、新聞社がリマで待期しているようです。

さて会報への報告原稿、薄暗い電気で書いたので、乱筆にて失礼、よろしく御訂正下さい。朝日に書かなくてはならないので苦痛です。また、ブカランラ峰の登頂が済んで、ワラスへ戻りましたら、七月二十一日以後にお便りいたします。

では山岳会の皆様によろしく。

吉沢様 御気遣い如何ですか。出発前はいろいろお世話になりました。有益なご注意を頂いたお蔭で、総てスムーズにいき、手続きその他でも大使館で、一番完璧な隊だとはめられました。

六月十八日から二十八日まで、カウヤラフ中央峰(5,680m)に登って参りました。

リマでは丁度ウルワシラフに登るため来ていたブラジルのギオビ氏が、今回の隊員として参加するイタリーのカルロ・マウリ(GIV登頂者)とともにわざわざ私のところを訪ねて下され、カウヤラフのルートについて直接、アドバイスして下さったので感激しました。

ポーターは御推薦頂いたパブロ・モラレスをカウヤラフとブカランのBCまで(彼の務めの関係)、そしてブカランのポーター頭には、ビクトール・アンヘレスを雇うことが出来ました。ブカランにはパブロの兄、マルセリーノ・モラレスが行くことになりました。ポーターは予想以上によくやってくれたので助かります。

昨日は街で声をかけられ、思いがけ

ず英語で問いかけられましたが、話しているうちに、ラミレスとわかり、両方驚ろき合いました。吉沢さんに呉々もよろしくとのことでした。

七月一日からブロー二五頭と、坂倉ヘーフェのための馬一頭を集めて、ブカランラに向います。雄姿を御想像下さい。

松田 柳子

◆ 帰国御挨拶

残暑の候益々御清祥のこととお慶び申し上げます。エーデルワイス・クラブのペルー遠征登山に際しましては、多大の御支援を賜わり、誠に有難うございました。

われわれは、六月二日と二四日に、カウヤラフ中央峰(五六三六m)に登頂することが出来ましたが、目標としたブカランラ峰(六一四七m)は、頂上直下約六〇〇mの地点に阻まれ、残念ながら約六〇〇mの地点から引返して参りました。

約三カ月半に亘る行動を終え、八月二三日、全員無事帰国いたしました。私達にとっては初めての海外遠征であったため、充分な成果は上りませんでした。が、この経験を生かして、今後も精進いたしたく存じております。これからどうぞよろしく御指導下さいます様お願い申し上げます。

八月二七日

エーデルワイスクラブ
ペルー・アンデス遠征隊

坂倉登喜子
黒石 恒
三浦多美子
松田 柳子
鈴木 文子
根本 洋子
大沢 萬



カウヤラフ・登頂・報告

坂倉登喜子

一九六六年エーデルワイス・ベル
I・アンデス遠征隊は、五月三日と五
月二十七日、二隊に分れて日本を出
発。五月二十九日、全員リマに集結、
大使館、文部省その他通関手続など
を済ませ、荷物受取りのため、松田隊
員他二名を残して、坂倉他三名は六月
二日、コノチャ峠（四〇六〇米）を
越えて、登山基地ワラスへ向った。

リマを朝四時に出発してワラスの中
央広場へ着いたのは午後一時頃であ
ったが、真青な空に仰ぐ六千米級のアン
デス山脈の山容は、先ずそのスケール
の大きさと、その姿の美しさに、予想
以上の圧迫感を感じた。

自動車の運転手は心得たもので、広
場から近い谷川宅へ直ぐ私たちの自動
車を横づけにしてくれたので、やっ
と、一安心という気持ちで、在留日本人
として有名な谷川家に落つかせていた
だいた。

予想外に荷物の受取りがおくれてワ
ラス滞在が長びいてしまったが、その
間細かい点まで谷川夫妻が世話して下
さり、全く恐縮してしまつた。

五月十四日、待ちに待った荷物が十
時半頃到着、松田隊員外二名も午後一
時頃谷川宅に着き久しぶりに全員賑か
に夕食をいただくことができた。

早速登山準備を始め、ブーロ集め
や、トラックの手配などを頼んで、五
月十八日漸くワラスよりカウヤラフ山
麓ヤナハンカ農場まで、荷物と共にト
ラックで出発した。

お屋近く農場小屋の前へ到着、先発
したブーロを待つて荷をつけ、昼食後
広大な牧場を横切つて尾根の反対側の
湿原帯に、中継テントを張り、清冽な
流れのほとり一夜を明かした。

翌朝テントから起き出ると湿原一帯

が真白な霜で、初秋の尾瀬を思わせる
寒々とした風景だった。

陽が輝き始める頃、可愛いタチヤマ
リンドウをそっくりの花が星のように咲
き、漸く地塘の美しい原にあたたかい
光が満ちはじめたので、テントをたた
み、湿原のへりぞいに牧場小屋（ワラ
ス根の掘立て小屋）の前を通りベース
設営地へ向った。

ブーロはここまですと、水河の流れが
凄まじくたて、流れ落ちる渓流の左側
台地に荷を下し、ベースの設営準備に
かかる。

五月二十一日BCから約三時間余、
水河を登った五一〇〇米の地点の雪上
にC1を張り、その翌日五月二十二日
偵察を兼ねて、雪深いカウヤラフ主峰
（五六三六m）を目指した松田隊員他
三名の登頂隊は、午後十二時四十分頂
上を極めた。

また一日休養した後、五月二十四日
風が強くて天候が急に悪くなって心配し
たが、三浦他三名の第二登頂隊は、午
後一時頃頂上を踏み、無事にC1まで
下山した。

今回のカウヤラフ登頂はあくまでも
高度順化が目的で四六〇〇Mのベース
及五一〇〇MのC1キャンプにおける
女性の人体に及ぼす変化について、黒
石ドクターが、種々調査したが、ワラ
スに永くいた隊員は高山病にあまり影
響なく行動できたが、リマにいた隊員
はあまり順化できず差がついた感じだ
った。

ポーターのパブロ・モラレスと、エ
バン・ヘリスタとは実に純粋な青年で
終始私たちに協力、感を働かせて仕事
をしてくれた。

ラジオやトランシーバーが珍らしく
「モシモシ、ワッカリマシタ」などと

ふざけたりして笑わせる程の茶目気が
あって、テントの中は何時も笑いに満
ちていた。

五月二十八日高度順化トレーニング
を終り、ワラスに帰ると、期を同じく
して芝工大の加藤隊長以下四名が到
着、谷川宅と一緒に、登山計画な
ど語り合った。

五月二十八日ワラスに戻った私たち
は、また再び次のプカランラ峰への登
山準備を整え、七月一日出発を期し、
隊員一同元気に各自の任務について
はり切っている。

『フエゴ島』

石原 国利

お褒りなくお越しのことと存じま
す。私たちのアコンカグア登山もお蔭
様で無事終了しました。南壁登攀の詳
細については、登攀隊長の橋村一豊君
からの報告が届いたと思います。北面
では日数が限定されたため、高度障害
に悩まされましたが、南面ではのんび
りした当地の登山家があきれるくらい
日数をかけたのがよかったと思ってい
ます。

今回の私たちの経験からすれば、七
千メートルまでのピークでは、かなり
困難なルートでも充分日数で、かなり
定率で完備すれば克服できると思
います。しかし、気象条件の悪いヒマ
ラヤの高峯で同じことが、一シーズン
で実現できるかということになると、
まだ問題はありそうです。

いずれにしろ、今回の私たちの経験
が今後の日本の登山に益することがあ
れば幸いに存じます。

アコンカグア登山が予想外に永引き
ましたので、バゴニヤ計画では、フ
イツ・ロイの登山が不可能となりま
した。しかし残された日数を利用して
いま三隊に分れてバゴニヤの旅行を

続けています。出来るだけ、バゴニ
ヤに関する知識（それもアルゼンチン
側だけに限定されますが）を豊富にし
て帰りたいと思います。

私は三月二十一日に単身でフエゴ島
に渡り、二十五日から二十七日にかけ
てウスアイアの登山家二名とMe:
OLIVA (4,400 m)に登りました。
当地の名山の一つですが、雪のついた
ときに登ったのは今回が初めてだそう
で、世話をしてくれた人たちが喜んで
くれました。オリビオ山頂から眺めた
ダイウイン山脈はなかなか立派でし
た。ビッグル海峡をへだてて見る南の
島の山々も高さは低いが、みんな綺麗
な山です。

南の果てのこのウスアイア (Usaia)
インディオの言葉で入江という意味だ
そうです。この町では、すでに冬が始り
雪まじりの冷たい風が吹きつけていま
す。このあと、四月上旬プエノスアイ
レスにて全員が合流し、四月十四日チ
リ・ウアスコ発予定の日水汽船アン
デス丸にて帰国の途につくつもりで
す。日本着は五月十日頃になると思
います。

いろいろな力を添えて下さった会の
方々には心から感謝しています。では
皆様によりしくお伝え下さい。では
昭和四十一年三月二十八日
フエゴ島ウスアイアにて
(松方会長宛)

『クラークが……』

今度はウインパー

E・ウインパーはいつまでたっても
話題の主だ。何でも広く書いてある
Ronald W. Clarkが、今度はまた
『The Day the Rope Broke』 New
York, 1965 というのをのした。豊
富な資料を駆使したとあるから、何か
新しい事実がわかるかも知れない。

(吉沢)

△アフガンへ▽

謹啓 雨期近い今日の頃ですが益
々御清昌のことと存じます。
この度本会のヒンズクシ山脈（ア
フガニスタン王国、ヒマラヤ山脈の西
端）登山につきまして格別の御芳志を
戴きまして厚く御礼申し上げますと共に
に甚だ勝手なお願ひばかりに終始した
非礼を幾重にもおわび申し上げます。
おかげ様にて先発隊四名は五月三十
一日、本隊七名は去る七日何れも元氣
いっぱい羽田を飛び立ちました。仙
台出発に際しましては御多忙のところ
わざわざ盛大なお見送りを下さいまし
て重ね重ねの御懇情のほど心から御礼
申し上げます。

両隊は十日カブル（アフガニスタ
ン首都）を出発し七月は始めから登山
行動を展開するわけでありましたがこ
まで進んで参り得ましたことはひとえ
に御貴台のあたためた御激励とお力
添えの賜でありましてこれを私達一同は
強く肝に銘じている次第であります。
この上は隊員十一名健康と細心周到
な行動に留意し所期の目的を達成致し
たい存念であります。長期にわたり勤
務を離れ多大の御迷惑をおかけ致しま
すがこの点などにこそ御海容下されまし
て隊員達の留守の間のこと何かと宜し
く御高配賜わりますれば幸甚これに過
ぎるものはいりません。

簡単に御礼の言葉を申し述べ登山隊
出発の御挨拶と致します。
末筆失礼ながら御貴台の御健康を祈
り上げます。

昭和四十一年六月
東北学院大学山岳会
幹事長 常盤 一雄
隊長 板橋 元一

敬具

いろいろと御指導を賜わりありがと
うございました。二十五日カブルを出
発しました。

☆ 安川 隊 便 り ☆ ヒンズー・クシュ

拜啓 新緑の候となりましたが、益々ご健勝のことと拝察します。日ごろご無音にうちずましてなんと申訳なく深くお詫び申しあげます。

昨年十二月十三日にて小生も満四十才の馬蹄をかきまわしたことに気づき、ことに「不惑」の年とあっては内心まことに忸怩たるおもひにかられております。しかし今さらとやかく騒いでも致し方ないと思念いたしまして、いくらかでも若返えらうとて、好きな山にまたぞろ専念しはじめた次第です。

昨夏は、剣岳大谷の岩場を攀じ、暮から正月にかけては槍平で冬山をすごしまして、いささかトレーニングをかされた末に、今夏はひとつ海外という野心をいだくにいたったしだいです。

六月二十九日より八月末の二カ月、第二次RCCの同人たちと計り、ヒンズー・クシュへアフガニスタンより入山したことになります。年長ということで隊長にされました。あれこれ雑事に追いまわられておりますが、なせこれまでに海外経験もなし、資金も乏しいなど、様々の不安もありまして、半信半疑の隊長といたっていたらくであります。

日ごろのご無音をお詫びがたが、小隊の計画書を同封申しあげますので、ご一覧の上、ご鞭撻ご支援たまわれば幸甚に存じ上げます。

五月三十日

安川(長越) 茂雄

われわれ第二次RCC・HK登山隊は、七月九日 Sunday 羽田発で出発しました。デリーで乗換えカブールには一日 11:30 am (現地時間) に到着。

先発の青柳、石井の出迎えを受けました。

われわれの目指すワハンは可なり困難の模様で、西独1、英国(劍橋等)2、日本(千葉、東北学院)2の五隊が入山の由。

アフガニスタン登山局などの申請中にはワハシ入谷のパーティはなく、禁止区域の地図まで出ています。

在カブール大使館は真崎大使、笹島書記官など極めて好意的で、殊に笹島氏の尽力は、われわれアルビニストのために貴重であります。

アフガン政府の入山禁止区域は極めて広範囲であります。国境より三〇キロとされております。このために、Narak もこの中に入ります。

しかしアフガン政府は、山について全く無知で、日本大使館も困っております。山についてはわれわれは、大なり小なり、発狂者なのですから、可なりうるさいわけです。

最も心配していた入山料については、観光局よりの要請があったらしいのです。しかしこれは幸いにも大使館及び外務省(アフガニ)の反対にあって実施せられず、その代りに食糧についての税金がかけられました。

東北学院大が約六万円弱とられました。私達も五万円ほどとられました。吉沢さんのお話しでは三〇〇〇内外と申せましょう。

次第にやります。

ただ期間が八月下旬位までなので、どれだけやれますか、踏査隊なので様々な事情を調査してきます。

免に角、大使も笹島さんも、アフガン政府が極めて暖昧な態度なので、窓口を絞って入山交渉をした方が、スムーズにいけるわけをします。

いずれにしろ日本を入れて五隊が、アンジュマン付近にベースをおいていられるから、インターナショナル山剣沢なみという事です。ワハシ入山の可能性は残念ですが、日本隊の入山してはいないヒンズーからのモンジャンのコースは魅力的であります。

九月上旬には帰国します。詳細は又。(二四一八) 安川茂雄

再び グリーンランドへ

— 日本大学隊 —

拜啓、この度日本大学第二次グリーンランド登山隊に對しまして多大な御支援を賜り厚く御礼申し上げます。お蔭様で準備も予定通りに進み、五月二十日(金)午前十一時、横浜港をソ連船バイカル号にて大横橋から出港することになりました。尚、登山隊は十月一日に横浜港に帰港する予定です。

以上、御報告申し上げますと共に今後の御支援を心からお願ひ申し上げます。敬具

日本大学第二次登山隊 隊長 中島 啓

現地通信第一号

池田 錦重

御無沙汰しております。全員元気で六月三日コペンハーゲンにつきました。今日(六月十七日)で、やっと船

に荷を積みこみ、アンマサリクに向けて出帆するだけとなりました。ソ連の汽車の旅は昨年同様モスクワまでは素朴な農民や労働者とキャンピングを同じくし、たいへん愉快な旅でした。

モスクワで我々を案内してくれた通訳は、立大山人についてカフカズにいくのだといい、その偶然に驚いた次第です。

コペンハーゲンまではポーランド、東独経由ですが昨年に比べ、ツォリスに對する国境のとり調べがゆるくなった様に思われます。我々の手荷物も開封どころか、手を触れる事もなく、デンマーク入り出来たことは幸いでした。

コペンハーゲンでは、昨年同様、我々の活動に地の利を得ている。O. G. H. 居を構え、準備をととのえまくなつては昨年比し、一、二割高くなつてはいます。

グリーンランド貿易商會(K. G. H.)でアンマサリクに行く船の便を確かめたところ、東京で我々が予約した六月十八日の船がやはり、今年の第一便のようです。

新潟大学の行く Scoreby Sound は我々のいくアンマサリクより北方にあるため、第一便の出発はおそく、七月上旬になるそうです。

しかし我々の船も六月四日現在では、グリーンランド海流の流水の状態により出発が前後することがあるという事で、予定がたちにくいうそうです。我々の今日乗る砕氷船は Nille Dan と呼ばれる約八〇〇〇噸位の立派な補給船です。このあと大使館邸で夕食の席を設けてもらったり、大使館の上にあるグリーンランド省に挨拶にいき、そしてさらに一部不足している食糧、裝備の買付を六月七日で終り、準備が完了しましたので、六月八日

十三日まで、ストックホルム・オスロと汽車で小旅行をしてきました。オスロでは、ホルメンコレンのスキー・シヤンツェの下にあるスキー博物館で古代のスキーや、ナンセンがグリーンランド横断の時に使った道具や、アムンゼンの使った極地裝備をみ、このあと、海洋博物館ではナンセンの Polar Ship "Fram" 号やコンチキ号などを見学し、思いをあらたにして帰ってきました。

六月十三日、コペンハーゲンに帰つてくる、すぐ K. G. H. に船賃の支払いにいき、六月十四日はデンマーク山岳會會長の Erik Hoff 氏を彼の事務所を訪ね、一時間位でしたが今年のグリーンランド遠征隊につき、種々と話を聞いてきました。彼の話によると、横断隊は、フィンランドのピカラ隊長以下六名が、昨年英国隊がトラバースしたルート、今年は大槓を使ってトラバースするそうで、先月すでに飛行機でグリーンランドに向つたそうです。

登山隊は、新潟大学の Scoreby Sound を除いて、他は全部スイッツァランドに集まるそうです。

① 英國隊(多分 Imperial College の隊と思いますが)マイク・トーマス隊長以下七八名の隊員で構成されているようですが、詳細不明。

② デンマーク隊はブライベートの隊が、八名で入る由。

③ デンマーク・イタリ合同隊(三名・三名の六名隊)は Semik Fjord の右岸 Ikasau lag 及 Qitangasung 6 Fjord の奥に各々の BC を設け、一〇〇〇m から二、〇〇〇m の未踏峰の山登りをするそうです。

④ スウェーデン(五名)ノルウェー(三名)の合同隊……七月九日にスイツァランドに入るそうです。

⑤ スイス隊……出発前、田中栄蔵



いわなどめ・1962

会務報告

支部総会報告(IV)

熊本支部

一、支部構成人員

四月十五日現在、二十一名

二、役員構成

支部長 三谷孝一

常任委員 西沢健一

委員 玉名金助、首藤宗利

馬場 猛

一、支部の主たる行事

支部会員の親睦と連繫を兼ねて毎年春秋二回の集会を行なっています。春の集会(五月六日頃)は、通常総会であって、決算報告、予算承認及び役員改選を行い、春、秋ともに集会の翌日は(土、日)泊を選んで(一)簡単な山行を行なっています。昭和四十年度は六月十九日(二十日)に阿蘇山板木温泉で総会を開き(九人出席)また十一月二十日(二十一日)には瀬の本高原ユースホテルで創立六十周年記念集会を開き(十三人出席)記念山行は久住登山を行な

いました。本年度総会は、五月下旬又は六月上旬に開催予定であります。その他支部報の発行を申し合わせていますが、まだ発行していません。

「第三一回小集会報告」

シルクロードの旅

深田 久弥氏

七月五日一九時
於 岸記念体育館

・話の 概略・

シルクロードとはドイツの地理学者リヒトホルヘンが名づけたもので、私としては、最も興味のあるシルクロードの東の方に行きたかったのですが、中国領の為現在入国不可能で、興味の薄い西半分に行くことになりました。ヒマラヤに行く前にも、あたかも行って来たような本を書きましたが、今度も行く前には本は出しました。

隊員には条件として自動車と山登りの出来る人ということで東海支部の鈴木君、東洋学者の長沢さん、白水社で「デン全書集」などに携わっている藤原さんというメンバーになりました。朝日新聞からはトヨタの自動車とガソリンの援助を受け、むこうでホークスワグンのワゴンを購入し、イスタンブールを出発点としました。シルクロードは、世界の国の中で日本においてほとんど興味を持たれその名が普及していないところはないと思います。出発にさきだち私は三つの抱負を持っています。

一つは、旧約聖書のノアの箱舟が着いたというアララット山(トルコ東北部に位置する高度五一六〇米)の冬季初登攀をする。二つは、イラン、アフガニスタンから砂漠を通過してソ連領トルキスタンに入ってみたい。三つは、ワハン谷を行けること

で奥深く行ってみたい、ということでした。

アララット登山については、決して難しい山ではないが、自動車旅行と日程の関係、最初からの心構え等で頂上直下二百米で引返してしまいました。

二つ目のソ連領入国は、陸路入ることとは禁じられ、グルジアの首府トビリリス、タシケント、アジュビヤと飛行機で点々と見学して歩くより仕方がありませんでした。種々遺跡を見て廻ったのですが、近東とかフアラースを中心とした物の考え方は、私が実感したことは、文明の中心はチグリス、ユーフラテスで西に延びたものがヨーロッパへ、東に延びたものがインド、中国、日本へと伝わったということでした。

トインビーの説によれば、文明の伝播には中間駅があるということですが、日本は文明の終着駅になっていると思います。

単純、殺風景なチグリス、ユーフラテスも、眺める人の憧れの度合によって違います。なにしろ歴史の古さというものを痛感しました。

この文明の発祥地も現在は後進国となり、非常に貧困で、アフガニスタンの道路は、アメリカとソ連が作っている実情で、文盲率が高く、政情不安な国々です。心強く思ったことに、若い日本の女性で強く口語、古代アラブ語というような地味な勉強をしている人がいるということでした。

三つ目は、永年の夢でありましたオクサス川を見ただけにとどまりました。最後に印パ国境を越えて四ヶ月の旅を終りましたが、酷暑の夏を避けて冬の時季を選んだのは非常に成功だったと思います。

この後スライドで古いモスク、カブ

ールに眠るオレールスタインの墓、ダリユースの像、サマルカンドのバザール等めずらしい写真と持ち帰られた民芸品を見せてもらいながら、楽しい質疑応答で二時間を過ぎました。

東京支部会務報告

八月三日(水)役員会

出席者 石原・野田・戸野・堀川・関口・大西・武田・須田・村井田・広谷・小味・野萩・松永(折井・山口)

1、報告事項

(イ) 中華民国台湾省山岳協会登山

隊訪日の件

(ロ) 七月二十日開催のビールパーティーの件

2、議事

(イ) 支部創立二十周年記念行事に

関する件

(1) 記念山行

期日 十月二十三日、係 村井田・松永

(2) 記念パーティー

期日 十月十一日又は十三日、係 野田・堀川・関口

(3) 記念品作成

係 小味・細井

以上三項目に関して、各係原案を作成検討する。

(ロ) 八月十七日三水会の件

アフガニスタン高原の話 外務省

情報文化局林知彦氏。

日本登山学校秋季授業

第一回(九月六・二九日)

日本登山学校というものの、映画ジェ

ガール・ヒマール、遭難の処理、登山

保険のこと、実技、秋山の条件、雲と天気図、山の医学、岩登り、用具と装備。

第二回(一〇月四・二七日)

マダギと熊、南会津と尾瀬、神奈川

氏に知らせてもらったとあり、Sta. Angerer が隊長で大機を仕立て、Kangerdlugssua Fjord に入り、Glacier De France の北側の山に登る計画のようです。

⑥ ドイツ隊……ナンガパルバットで名をはせたヘルリッヒ・コフファアが来年グリーンランドの北側から北極点横断を目ざしており、今年にはアンダス・マリックをベースに北の Peary Land にデポ地点を設けるべく入るそうです。彼らはこの仕事が終わった後スィツァアランドの南部で山登りをするそうです。

とにかく、今年のグリーンランド・スィスは各国遠征隊が殺到したといった感じです。

今日も船会社に行きましたところ、我々と同じ船にどこかの隊が乗りこむようです。大分昨年と異なって、僕らのいく地域はさわがしくなりそうですが、ゆっくり山登りをしてきたいと思っております。会の皆様に宜しくお伝え下さい。(六月十七日コペンハーゲンにて松田宛)

(ハ) 委員の会務代行の件

(ニ) 婦人部有志のニュージール

ド行に関して連絡係委任の件、係

小味・広谷・松永

以上(松永)

岳連隊報告、日ソ交流登山、近代登山、本・音楽・文学、白峰三山縦走、山の衛生。

第三回(十一月一・二九日)

集中登山、沢歩き、西丹沢実地沢登

り、世界の山、JACの写真、日高の山

々、岳人伝、JACのエベレスト、雪上耐風技術、富士山合宿、世界の

山にかける夢、忘年山行。

ソ連の4つの7000 M 峯 (2)

—その登攀クロニクル—

A.I. Polyakov 著
田村俊介訳PIK KOMMUNISMA (COMMUNISM 峯)—7498 m—
PAMIR, 科学 ACADEMY 山脈と DETERI 山脈の接合点

No.	登年	攀代	登頂者数	未登頂者数	Route および登攀隊長、登頂者
13	1958		10	1	Lenin 氷河から Pik Razdelnii を経て、隊長 A. Arzanov と O. Glembofskii (女性 Alpinist E. Mamlieba を含む)
14	"		0	7	同上 Route より、隊長 S. Savon
15	"		14	0	Oktyabrskii 氷河、Saukdara 氷河および Krilenko 峠を経て南面から、隊長 D. Medzmariashvili
16	"		38	20	同上 Route より、隊長 K.K. Kuzmin 21 人の Soviet Alpinists と 17 人の Chinese Alpinist より成る
17	1959		14	11	Lenin 氷河から北斜面を経て、隊長 P. Shumikhin (2 人の女性 Ge. Rojalskaya と L. Maslenikova を含む)
18	"		6	2	Oktyabrskii, Saukdara 氷河から Krilenko 峠を経て、隊長 S. Savon
19	1960		25	2	同上 Route より、隊長 B. Romanov (2 人の女性 N. Lebochkina と T. Sabinova を含む)
20	"		8	0	Krilenko 氷河から北面より (初 Trace)、隊長 V. Cheredova
21	"		6	0	Lenin 氷河から Pik Razdelnii を経て、(Zaalaiskii 山脈の縦走) 隊長 V. Abalakov
22	"		24	0	Lenin 氷河から北斜面を斜て隊長 P. Skorobogatov
23	"		21	0	Lenin 氷河から Pik Pazdelnii を経て、隊長 A. Romanov
24	"		5	0	Lenin 氷河から北斜面を経て (正面より)、隊長 Ya. Arkin
※25	"		18	0	Oktyabrskii 氷河を経て南面より (Zulumart と Zaalaiskii 山脈の縦走) 隊長 L. Akhvlediani
26	"		9	2	Lenin 氷河から Pik Pazdelnii を経て (登攀隊員の中に V. Padzinskaya を含む、隊長 V. Andreev
27	"		3	0	Lenin 氷河から Ya : Arkin Route を通り北斜面を経て、隊長 O. Abalakov (2 度目の登頂)
28	1961		7	0	Lenin 氷河から北斜面を経て、隊長 B. Korshunov (登攀隊員の中に 2 人の Rumania と Chekko 人を含む)

29	1962	38	3	Oktyabrskii, Saukdara 氷河と Krilenko 峠を経て南面から、隊長 V. Monogarov
Total		308	170	

PIK KORJENEVSKOI
(KORJENEVSKAYA 峰)—7105 m—
PAMIR, 科学 ACADEMY 山脈の北西支脈

No.	登年	攀代	登頂者数	未登頂者数	Route および登攀隊長、登頂者
1	1937		0	6	Fortanbek 氷河から中央峰 (6910 m) まで、隊長 A. Getie
2	1953		8	0	Fortanbek 氷河から、隊長 A. Ygarov
3	1961		27	0	Moskvin 氷河から南西稜より、2 隊、隊長 B. Romanov, M. Greshnev (4 つの 7000 m 峯に登頂した唯一人の Alpinist E.I. Ivanov が登攀隊員の中心)
Total			35	6	

35 年間に 454 人の登攀者がソ連の 7000 M 峯に登頂した。登攀者の中には 17 人の中国人、4 人のイギリス人、3 人のドイツ人、2 人のルーマニア人、それに 1 人のチェコスロバキヤ人がある。又 25 人のソ連邦のアルピニストが中国人民共和国の領土に位置する 2 つの 7000 M 峯 (MUZTAGHATA 7546 m と KONGURTAG. 7595 M) に登った。即ち 452 人のソ連のアルピニストが 7000 M 峯の頂上に達したのである。これはみごとな成功である。国外の既に登頂されている 7000~8000 M 峯には若干の登攀が行なわれた。

一般に西欧のアルピニストは 2 ないし 4 人のグループあるいは時には単独でさえ高所登頂を実行する。既に述べたようにソ連のアルピニスト達は 15~25 人のグループでこのような登攀を行なうことが多い。この中心にはベテラン・アルピニストだけでなく一級アルピニストもいる。

12 の登攀の試みが失敗した。そして 253 人のアルピニストが目的を達し得なかった。しかし西欧においては 100 以上の 7000~8000 M 峯攻撃が失敗している。

(訳者注)

ソヴェトにおいては毎年、① 技術的に困難な登攀 (主として Caucasus 山脈の氷壁・岩壁登攀)、② 縦走、③ 高所登攀 (主として PAMIR, 天山山脈) の 3 部門に分けて、優秀なグループおよび個人に対して、表彰を行なっている。そして各々にメダルと賞状が授与される。この表彰は「ソ連閣僚会議直属体育およびスポーツ委員会」によって行なわれていたが、1959 年から「ソ連スポーツ協会連盟」が行なうようになった。

このクロニクルの中の※印は、その年の高所登攀部門第 1 位になったものである。但し PIK LENINA の NO. 25 はその年の縦走部門第 1 位である。

出典

標題「征服された峯々」

Побежденные Вершины Pobezhennye Vershini

副題「ソヴェト・アルピニズム年鑑」(1953 年~1961 年)

Сборник Советского Альпинизма

Sbornik Sovetskovo Alpinizma

出版社 国立地理学出版社。出版年代・モスクワ 1963 年

監修 E.D. Simonov

図書紹介



アメリカ山居会

中村 謙著 山小屋の旅

(S・H生)

つぎつぎに親切におもしろい山案内を出して、ハイカーやアルピニストから調法がられている中村君の新著である。

近ごろは大ていの山に小屋ができたので、テントをかき上げなくても相当地の山あるきが出来たようになった。中村君が山小屋を利用して、三泊で楽しくあるきまわられる山を、関東・中部地方を中心に、それに羅臼岳から大峯山縦走まであちこちの山をつけ加えてこの本を編んだゆえんである。

同君の本はその山の選びかた(この本には東北の半島や大島、佐渡の島めぐりも入れている)に特色があり、所要時間や登路の説明などは、著書が歩いたところによって書いてあるから、記述は簡単だが、正確でなかなか味がある。寝ころんであちこち拾い読みしてもけっこう楽しめる本だ。

昭和四一年五月二日書房発行。本文三八四頁、口絵写真三葉、本文中に略図と写真沢山。定価四二〇円。

・越後山岳会報・ 越 稜 (第三部)

川崎 隆章

本会越後支部加藤勝義君を代表とする越後山岳会報第三号である。越後人気質というものがあつた。それは冬季のあの自然のきびしさ、未踏地の多い飯松、スズ竹こぎの山道への道、一夜に数メートルつものドカ雪、井戸のうに深い沢歩き、瀑布とナダレ、こうした自然環境がそれをとり、技術を得させ、自からワカンをつくり、装備を提案させ、根強い山男をつくつたのだと思う。

彼らは積雪期にテントをもたない。雪洞やビバークによる山行は彼らの独壇場である。雪に強い男、悪沢と戦う男、スキーを意のままに操縦する男、山にぬれる男、このような山男たちを友にもつ私には、過去に色々数えられるものがあつた。彼らの山の生活技術からみれば、東都の岳人のそれは弱く甘いものに満ちている。

この第三号は彼らのホームグラウンドにおける過去数年間の集約で、浅草岳から巻機山までの大縦走(四月・五月)、飯豊連峰松山沢(七月、飯豊連峰北沢(八月)、飯豊連峰縦走(四月)、飯豊山(八月)、飯豊山(八月)、や果山岳連盟登山祭(万太郎、清水峠、朝日岳、国体予選(苗場山、小松原)、下越地区交歓登山(川内山塊山宿沢、赤花沢、全日本登山体育大会(巻機山、八海山、奥只見)、国体強化合宿(二王子岳)などがある。

本号は新しい企画として横書の左空白部に日時、天気記号を付帯させてゆく方法で、本文をよみながらいま何時頃を行動しているか天候はどうか、一見して瞭解出来る分りよくスッキリしたものになって、今までの会報にみられなかったものである。

越後岳人の集りであるこの会などは山行形式、新しい登山技術、ラッセル、山スキー術、殊に雪崩、落石対策などの研修会を行ない会報にすすんで発表すべきである。

加藤君が百回以上も登った一ノ倉沢、この沢一つの徹底的研究もよい。五月の連休に一ノ倉沢二ノ沢出合付近で我々登山学校で雪上訓練中、滝沢方面より地鳴りと共に小規模のブロックナダレが近づいたが、我々に影響なくナダレの進路は南後寄りにかーブを描いて行った。ところが五月二十二日天候小雨、低気圧(九九四ミリバール)伊豆大島沖を通過中)あさ八時ごろ二ノ沢で雪上訓練中の東京理科大生が二〇〇メートルの高所から起きた幅五メートルのナダレをよけきれず、背骨を折るといふ事故が発生している。もっとも初心者と思われる二ノ沢には、数年前山岳写真家・故横田裕一氏がアドベンチャースキーヤー三浦敏一郎君のスキー撮影のため入谷し、一滑り後ふり返ると、二ノ沢の頭にノロシのような煙がみえ、それが大きく迫り目の前を爆風を起して行った。ナダレは二人の足下五メートル前で一ノ沢の方へ山をゆるがしながらカーブして行った。もしまだスキー撮影に熱中していたら当然二人はナダレをよけきれなかったと思う。

越後のような谷川岳周辺をホームグラウンドとするような会は、このような事故のない事故以前のことにしても学問的に追究し研究すべきで、そのような研究が誌上になされてないことは、先刻私が越後岳人は山にも雪にも正しい人々であること推賞した手前さんねんなことであるから反省してほしいことを付言する。

このことはこの会にのみいうのではなく、登山という大きな自然に抱擁され、その中に生きようとする登山本来のものに傾倒しようとして、岩場あきりに浮身をやつとして世の多くの山岳会の人たちにもいえる。歌謡曲界に歌屋というのがあるが話題となつた。

そこで人工登攀をもって岩場のみに熱中している若人はいったい登山家なのか、岩屋なのか、もし岩登りが本来の山で、他のものは眼中にないならば人間形成という大事な懸案上からも大至急考え直さなくてはならない。

ついでに山はスポーツと二言目に称する人が多い。これはこれらの人の軽薄さ、オッチョコチョイさを広告してよくやるものであるから、これ又よく考え直してほしい。分らない人はよき先輩のところへゆき登山とはどういうものなのか教えを乞うと、自分の非をさとることであろう。

A5判タイプ刷一五頁、会事務所新潟市東新町一、吉田正義方

日本山岳会東海支部 「東海山岳」

(No. 2), 1965

Y・M生

本会東海支部の支部報である。第一号は、会報二三八号九頁に紹介されているが、このたび一九六五年版である第二号が刊行された。

内容の主なものを紹介すると「登攀記」は第一号同様充実している。滝谷第一尾根及びドーム正面登攀(一九六二・三)、屏風東麓・前穂Dフエンス冬期連続登攀(一九六二・一)、鍋杖岳島嶼山岩前衛峰P₂中央壁(一九六四・三)、屏風岩東麓・鵜飼ルート冬期単独登攀(一九六五・一)、同雲麓ルート冬期単独登攀(一九六五・一)、前穂高東壁Dフエンスダイレクト冬期登攀(一九六五・一)「翻訳」は、トニー・ハー

ゲンの「ネパール・ヒマラヤ山王国」よりの抄訳、ネパールの歴史の概観、アノルド・ランの登山の百年史より登山の白銀時代。「海外の山」は、アフガニスタンの山を浅野竜雄氏が、中央カフカスの山を田村俊介氏が執筆しており、共に参考になる点が多い。「論説」として高校生のある登山禁止通達に関連して「研究」はヒマラヤの気象をとらえていっている。本号の追憶欄には遠征隊事務局長であった関谷誠氏の思い出がのっているが惜しい人を亡くしたものである。

尚、本号の巻頭にある放談会「登山界の諸問題をめぐって」と題して昭和40年8月5日の座談会をとりあげている。当時の雰囲気としては、種々と云いたいこともあつたとは思われるが、アンデス隊が帰国した後になつてみるとアンパランスな感じがしないでもない。文中しばしば本会の理事会を批判する記事があるが、会の支部の公式報告書であるのだから、編集者は表現法に注意して欲しかった。

B5版横組九二頁。アト写真一枚。図版多数。昭和四十一年四月二十日発行。

尚入手希望の方は頒価三〇〇円、送料五〇円を添えて左記へお申込下さい。本会ホームページでもお取次致します。名古屋市中区東町一ノ三〇

JACの店内

日本山岳会東海支部

「追補」 浅野竜雄君の「アフガニスタンの山」の中にある「オクサス流域登山表」を見ると、一九六四年に「な」があるが、実際はドイツのドベネック隊がランガールの三峰その他を登っているし、グルンパー隊も同年ジャチュルその他に登っている。尤も流域の山をどういう意味にのるか(反対側から登ったのではダメなのか)で違ってくるかとも思うが。(IY)

隊員達登山行の詳細な報告。M. Sain による Spring in the Himalayas. Maj. N. Kumar による Nanda Devi, 1964, K. P. Sharma による Attempt on Tirsuli, 1965 とインテリゲンによる最新の記録を収録しており、今号の論文は Raj Kumar Gupta による二十頁に及ぶ。Contribution to the Bibliography of Himalayan Botany 1 というヒマラヤの植物調査史があり、この方面の研究者には参考になると思われる。巻末にはインスタンチエットのレポートが詳細に収録されている。(松田)

La Montaña No. 7-Diciembre de 1965.

最近、海外より新しい Journal が次々と到着しているが、アルゼンチンからもこの種 Federación Argentina de Montañismo y Afines のジャーナル La Montaña が到着した。

本号には Fitz Roy や Aconcagua 等国内の山の記事の他に J. W. Whitaker による Monte Kennedy の詳しい記事がみられる。またアルゼンチンの高山植物の記事も、関心のある者にとって興味深い記事と思われる。(松田)

Sierra Club Bulletin Vol. 51-No. 4, April, 1966.

カリフォルニアの Sierra Club の Bulletin は九十七年以後、未着であったが、この程在日中の同会員 Glenn Converse 氏の骨折により同会より到着した。

伝統あるこの会報の今後の内容が楽しみである。(松田)

Revista Andina Vol. XXIII, No. 88, Dec, 1965.

チリ山岳会の機関紙が、この度到着した。

昨年チリに遠征した会員久野英一郎氏の報告によると、チリの山登りは中々さかん。Federacion de Andinismo y Excursion de Chile にはサンチャゴだけでも二十四団体が加盟しており、Compania 1725 番地にある山岳連盟の事務所は、古いビル棟が全部加盟団体の事務所として、毎週木曜日の夕方七時頃になると各山岳会共集会所が開かれ、九時十時頃になると、その中の主だった連中が Federación に集まり、理事会が開かれ横の連絡がとられている。この事務所の図書室には山岳も沢山並べられている由である。チリ山岳会は、日本での本会のような存在で、Federacion に加盟しているが事務所を Ahumada 47 番地にあるアパートにあり、この会館は他の山岳会にも借を置いてあることが多いところ。等、本会によく似ている。

Revista Andina の本号は、マッターホルン百年祭を巻頭に、アンデスにおける記録、会務報告、書評を収録。巻末にはチリ山岳委員会(Comision Antarctica Chilena)の Bulletin が掲載されている。

尚書評には「山岳五十九年」故山川勇一郎氏の「Himalaya, the Skeehes」がとりあげられている。(松田)

Jahrbuch des Deutschen Alpen-Vereins 1965. (Alpenvereinszeitschrift Bd. 90)

ドイツ山岳会の一九六五年の年報は Glocker 山塊を特集しており、半分の頁数を費やしている。ただ単なる記録や案内の特集ではなく、地図、測量、気象、歴史、ガイド等あらゆる角

度からメスを入れており、本会の「山岳」にも今後はこのような特集も考えてみた面白と思う。

海外遠征記録としては Deutsche Himalaya-Expedition 1964 と題して Richard Hechel がタルン・ゴークについてのページ。Adolf Diemberger によるヒンズークシの登山者の解明と題するワナ地域域の解説は、多くの資料を用いて説明している。参考になる。さすがはヒンズークシ研究の第一人者といわれるだけあって詳しい。山岳六〇年の吉沢一郎氏の資料と比較してみると興味がある。巻末にある Walter Brendel による Höhenklimatisation und Höhenkrankheit は 8,000 m 峰登山に対する高処医学の研究として興味ある論文である。巻末付録の地図は 25,000 分の 1 の Glockergruppe であるが、この地図によると Alpenverein が広大な土地を所有していることがわかる。(松田)

例によってオーストリア山岳会の会報はヒンズークシ、カラコルム方面の記録が多い。今号にも Berthner Karakorum-Kundfahrt 1964 によるカラコルム K-6 グループの新らしい七千米峰と題して Link Sar (7,040 m) を紹介している。日本からも K-6 周辺のコンダス氷河へ入る計画をもって行く隊もあるようであるが、この地域を目指すものには参考になる。(松田)

Österreichische Alpenzeitung Folge 1346, März/April 1966.

海外からの寄贈図書
1. Major John Dias: The Everest Adventure Story of the Second Indian Expedition
2. Pietro Mecani: Le Ande

◇海外図書紹介◇

The Everest Adventure by Major John Dias

インド政府の出版局から標記図書の新聞案内が届いたので紹介する。一九六二年の Everest Expedition の公式報告で Size 22.5 cms x 29 cms 六三頁、写真五五葉(カラー多数)という写真主体の報告書である。希望者は左記へ注文すれば購入できる。

Business Manager, Publication Division, Ministry of Information & Broadcasting, Government of India, Old Secretariat, Delhi-6 (India)
○価格は送料共五五シルまたは八ドル二五セント (松田)

“Le Ande, Pietro Mecani, Bologna, Italia.

楽しみにしていたが手にとってみて少しかかりた本の一つ。イタリア語で書いてあってもこんな本ならわかる。寄贈をうけて(私の買ったのだが)悪口を書いたのでは済まないが、昨年出たと思われる(発行年月なし)ものにしては一九六一年以後の記録のないのはどうかと思う。それに、私自身に關したところの調査の不十分さからみて他はおして知るべし。それにもっと古いところでもぬけているのが多いようだ。

今頃であるアンデスの本としては一九六四年までの記録は欲しかった。この間は最も多く海外から登山隊が入っている期間であるからである。この本の内容はメチアニーが、イタリア山岳会の機関誌「Revista Mensile」に連載したものを、訂正追補もせずに纏めたものである。然し多少の警戒心をもちながら読む(次頁四段へ)

お部屋の飾りに! 贈りものに!

山岳写真を

(本多善博)

本多写真工房

名古屋市中区柴田西町 1-16 電話 (611) 7047

- 全紙半切 パネル張り ￥1,000
- 全紙 (新聞1ページ大) “ ￥1,500
- 全紙2倍 “ ￥4,000

上記以外のサイズ、または同時に多数ご注文の際は、ご照会下されば別にお見積り申し上げます。

あなたのネガから、明快なコントラスト適切なトリミング(構図)で、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。
ネガと返送料 150 円同封でご注文下されば到着後 5 日以内に製作発送いたします。
代金は着品後 10 日以内に送料下されば結構です。なお代金前払いの方は返送料は弊社で負担いたします。また、特にトリミングをご希望の方はその旨明示して下さい。
但しネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちに返送申し上げます。

ルーム日記Ⅲ (41・5・7)

図書係からのお願い

本会図書室の「山日記」の戦後のバックナンバー欠号につき会報二五二号にて御寄贈方お願い致しましたところ、早速網倉志朗氏、藤島敏男氏、仲村恒明氏から御寄贈頂きました。紙上をかりて厚く御礼申し上げます。

尚戦前、「山日記」は十三冊でありますが、ルームには八冊しかなく左記の五冊が欠号になっておりますので、この分につきましては会員各位の中で、余分をお持ちの方がおられましたら御提供戴けますれば幸と存じます。

記

- 第二輯 一九三一年版
- 第三輯 一九三二年版
- 第五輯 一九三四年版
- 第六輯 一九三五年版
- 第十輯 一九三九年版

当番制実施について

のお知らせ(下表参照)

理 事 会

七月からルームの職員が通勤制になったので、これを機に、ルーム事務終了後の会員に対するサービスのため、久しく途切れていたルームの当番制度を復活することとし、七月一日から実施することになりました。

九月以降の当番の氏名は、ルームに掲示すると共に、逐次会報紙上に発表する積りですが、切角の当番ですから、会員各位もこの制度の趣旨を御認識の上、御利用下さるようお願い致します。

尚原則として当番は理事一名と東京支部委員一名が組となって当ります。この度、理事会並びに東京支部委員会での制度に関し、次のような申合わせを行いましたのでお知らせ致します。

当番制度実施に関する申合せ

一、当番は原則として二名を以て編成し、理事および東京支部委員がこれに当る。

二、当番の在室時間は、日曜、祝祭日、年末年始を除く毎日、平日にあっては午後六時三〇分より、土曜日は、午後三時より、午後八時迄とする。但し理事会、支部役員会、三水会等月例会日はこの限りでない。

三、当番が退出する時は、戸閉り、火のものと等充分に確認の上閉室し、鍵は責任をもってビル管理人に返納しなければならぬ。但し当番は午後八時以前であっても、本会役員が在室している場合に限って、当該役員に戸閉りを依頼して退出することができぬ。

四、当番の日程表は、ルーム担当理事と支部の総務担当委員とで打合わせの上、当該月の一ヶ月前に作成してルームに掲示し、各担当に連絡する。

「アラスカより」

徳久 球雄

出発前は失礼いたしました。7月24日、カルトラン水河にBCをつくり、8月2日、4日二回に亘り、ボナ山に登りました。

ボナは最近の地質調査地図によると16,600 ft (5,063 m) になっております。いままでは16,421 ft (5,006 m) でした。未踏になっている北峰というのは、Mt. Churchi と思われまふ。その他14,921 ft (4,548 m) の無名峰にも登頂いたしました。

詳細はまた帰国後、報告いたします。(吉沢宛て)

ば、決して役に立たない本ではない。各項目の書き方は、ベルナル・ビエールの「サルカンタイ征服」に従い、各々の最後に、文獻や地図名が掲げられているのはよい。

北はベネズエラから南はティエラ・デル・フエゴまで、万遍なく書かれていた。従って広く浅くアランダスを知るのは適当な本であろう。特に細分して説明してあるのはコルディエラ・プランカであるが、こういうところは能う限り最新の情報まで入れておくべきであらう。

第六章の「Punta de Atacama」以降は、第六章に分け、独特の分類法(エシバリアと違ふ)でやっていると、略図や写真なども含めて読みごたえがある。Asensio の本などお手のものなので、それを参考にしているのかもしれない。最後のところ、地名、山名だけの索引がついてあるのはいいが、そこまでの親切があったら、人名も序に入れておくべきであらう。(吉沢)

30	29	28	27	26	24	22	21	20	19	17	16	14	13	12	10	9	8	7	6	5	3	2	1
金	木	水	火	月	土	木	水	火	月	土	金	水	火	月	土	金	木	水	火	月	土	金	木
竹	加	婦	倉	村	依	大	細	鈴	松	委	廣	大	関	竹	武	会	支	山	小	宮	川	理	
内	藤	部	知	木	土	塚	井	木	田	外	谷	西	口	田	田	員	役	口	味	下	崎	会	
川	辰	西	村		平	堀	鈴	野		須	小	松	辰	野				鈴	沼	飯	長		
崎	沼		井		山	川	木	田		田	方	永	沼	萩				木	倉	野	尾		
郭			田				郭											郭					

31	29	28	27	26	25	24	22	21	20	19	18	17	15	14	13	12	11	8	7	6	5	4	3	1
月	土	金	木	水	火	月	土	金	木	水	火	月	土	金	木	水	火	土	金	木	水	火	月	土
野	松	沼	川	婦	加	大	松	委	海	須	辰	堀	廣	村	村	会	野	武	小	沼	理	支	小	長
萩	田	倉	崎	部	藤	塚	永	外	田	沼	川	谷	井	木	員	萩	田	方	倉	会	役	味	尾	宮
																								下
鈴	山	飯	宮		平	西	富		長	竹	野	鈴	大	倉		関	竹	細	鈴			山	飯	須
木	口	野	下		山	丸	田		尾	内	田	木	西	知		口	田	井	木			口	野	田
郭												郭						郭						

退会届 (41・7)

四八四六

安達久生

四八四七

小島伊喜雄

五二五二

萩原邦一

一八二九

小熊小五郎

一八五八

小林誠一郎

【補足と追報】

海外登山隊(4)の
東北学院大学の隊員
左の如し。

板橋元一(隊長、40)

加藤義明(41)、佐々

木郁男(32)、松倉和

義(30)、四方田靖(30)

寺島公也(29)、佐々木

節朗(28)、入賀繁(27)

佐藤武志(23)、黒瀬公

夫(22)、佐藤弘(20)。

追て、新聞報道によ

れば、7月28日午後5

時40分松倉佐藤(武)

の両君が、バンダカー

の第二登を南面から行

なったという。

編集後記

今月は20頁で、たま
っていた原稿を出来る
だけ沢山掲載し、次号
と次々号は8頁にして
まずはせめて発行日だ
けでも辻褄を合せる予
定。それにしても二冤
を追うのは難かしい。

(吉沢一郎)

昭和四十一年八月十日発行

東京都渋谷区神宮前

三ノ三 外苑コーポ内

発行所 社団

日本人山岳会

編集代表 吉沢一郎

頒価五十円

電話(03)六五〇一五

振替口座東京四八二九番

印刷所 株式会社 技報堂

☆会報製本御引受け☆

製本代 (201号~250号) 金600円也

送料別受け

中林製本手帳株式会社

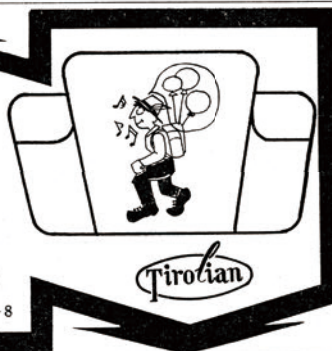
東京店・文京区水道端2~15, 電話(943)0311(代表)

大阪店・都島区相生町7, 電話(352)3491(代表)

名古屋店・昭和区雪見町1~15, 電話(731)7331(代表)

工場: 大阪工場(堺市), 東京工場(戸田町)

▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀



登山における
人体工学追求の
勝利!!

画期的な新製品

シャモニー
キスリング

株式会社 サクライ

TEL(861)0933-5 (851)3356-8